高槻市文化財年報

平成９年度

Ⅰ　埋蔵文化財の調査 …… 1

1　平成９年度の調査

2　調査の概要

高槻城跡の調査　木曽　広

宮田遺跡の調査　橋本　久和

高橋　公一

新池遺跡の調査　宮崎　康雄

津之江南遺跡の調査　高橋　公一

宮崎　康雄

安満宮山古墳の調査　鐘ヶ江一朗

今城塚古墳規模確認調査　宮崎　康雄

Ⅱ　文化財保護啓発事業 …… 26

Ⅲ　指定文化財 …… 30

Ⅳ　資料紹介 …… 32

梶原寺跡出土の羽子板　宮崎　康雄

１９９９年１月

高槻市教育委員会

高槻市文化財年報

平成９年度

Ⅰ　埋蔵文化財の調査

1　平成９年度の調査

平成９年度における土木工事等における埋蔵文化財発掘調査届出・通知件数は繰り越し分を含めて112件で、このうち調査件数は102件である。

調査を届出別にみると、「個人住宅の新築・増改築」が41件と昨年度の32件から増加した。道路・水路改修や上下水道整備などの公共工事は21件と横ばいとなり、共同住宅は６件、駐車場・倉庫等は４件、造成工事等は５件と横ばいもしくは減少傾向にある（表１）。

遺跡別にみると、嶋上郡衙跡が27件と最も多く、次いで高槻城跡（16件）、安満遺跡（９件）、宮之川原遺跡（６件）の順となっており（表２）、住宅密集地の個人住宅の建て替えが多いという傾向が平成９年度も引き続きみられる。宮之川原遺跡・大蔵司遺跡では公共下水道の整備、津之江南遺跡ではまとまった面積の造成や宅地等の開発がおこなわれている。

なお、平成９年度に実施した調査の概略については一覧表にまとめた（表３）。

表１　平成９年度　届出別調査件数

個人住宅	共同住宅	駐車場・倉庫等	造成工事等	道路･水路改修	上下水道整備	そ の 他	計
41	6	4	5	10	11	25	102

表２　平成９年度　遺跡別調査件数

遺　跡　名	件 数	遺　跡　名	件 数	遺　跡　名	件 数
嶋 上 郡 衙 跡	27	安満宮山古墳（安満山古墳群）	1	宮　田　遺　跡	4
宮之川原遺跡	6	梶　原　寺　跡	3	津之江南遺跡	5
大 蔵 司 遺 跡	3	梶 原 南 遺 跡	1	土　室　遺　跡	2
芥　川　遺　跡	2	上　牧　遺　跡	2	新　池　遺　跡	1
高　槻　城　跡	16	郡家本町遺跡	3	中　城　遺　跡	4
天　川　遺　跡	5	郡家今城遺跡	1	田 能 南 遺 跡	2
芝　生　遺　跡	2	今 城 塚 古 墳	2	計	102
安　満　遺　跡	9	氷　室　遺　跡	1		

No.	遺　跡　名(地区)	所　在　地	届　出　者	用　途	面積(m²)
1	嶋上郡衙跡(6−L)	清福寺町889−3	成田　斉	個人住宅	115.20
2	〃(13−K·L)	郡家本町334−1371	長澤　克巳	農道改修	130.00
3	〃(4−J·K)	郡家本町936	堤　隆	個人住宅	337.04
4	〃(74−K)	郡家新町156−36	谷内　公孝	個人住宅	52.62
5	〃(27−P)	清福寺町867−1·5·6	海野工務店	仮設道路	
6	〃(27−K)	清福寺町851−5	黒瀬　和也	個人住宅	95.35
7	〃(84−B)	今城町164−18	三村　尚·サト	個人住宅	139.98
8	〃(74−N)	郡家新町159−10	藤本　忠良	個人住宅	71.93
9	〃(43−F)	郡家新町395−19	松村　隆夫	個人住宅	90.54
10	〃(48−G)	川西町一丁目954−24	(有)ヤマト商事	事務所	251.17
11	〃(47−A·B他)	川西町一丁目974−1	高槻市教育委員会	校舎改修	
12	〃(28−M)	清福寺町850−1·2の一部	清水　康夫	駐車場	202.50
13	〃(57−G)	川西町一丁目972−7	近藤　正之	個人住宅	99.54
14	〃(28−O)	清福寺町836−3·4	山本利男·馬場シゲ子	個人住宅	245.66
15	〃(23−G·K)	郡家新町418−2の一部	ホンダプリモ高槻	中古車展示場	792.00
16	〃(7−C)	清福寺町781−1他	西村　義隆	個人住宅	228.00
17	〃(7−C·D)	清福寺町781−2	吉岡喜一郎	個人住宅	165.28
18	〃(6−A·H,16−A·E)	郡家新町262−1	高槻市下水道部	下水道	
19	〃(67−C)	川西町一丁目1087−17	藤當　朱美	個人住宅	57.38
20	〃(27−J·K·N·O)	清福寺町867−1他	高槻市教育委員会	フェンス	
21	〃(56−A·E·I·M,66−A)	川西町一丁目·郡家新町	高槻市下水道部	下水道	38.90
22	〃(44−O)	郡家新町343−1の一部	栗山　典子	個人住宅	374.40
23	〃(48−P)	川西町一丁目964−1	千田　金治·恵子	個人住宅	75.95
24	〃(46−E)	清福寺町地内	高槻市下水道部	下水道	524.00
25	〃(5−L)	清福寺町756−1	下村　ミエ	個人住宅	68.54
26	〃(28−E)	清福寺町829−7	和田　時男	個人住宅	60.60
27	〃(27−B)	清福寺町911地先	高槻市下水道部	雨水配水管	2.26
28	宮之川原遺跡(97−1)	宮之川原五丁目527−18の一部	小園　繁	個人住宅	42.67
29	〃(97−2)	宮之川原五丁目527−18·19	芝田　暢能	個人住宅	85.34
30	〃(97−3)	宮之川原五丁目505−36	平岡　博光	個人住宅	80.84
31	〃(97−A)	宮之川原元町地内	高槻市下水道部	下水道	96.00
32	〃(97−B)	宮之川原五丁目504−4他	高槻市下水道部	下水道	330.00
33	〃(97−C)	宮之川原五丁目516他	高槻市下水道部	下水道	250.00
34	大蔵司遺跡(97−A)	大蔵司三丁目295−2	巽　明夫	個人住宅	80.16
35	〃(97−B)	大蔵司三丁目295−1·2他	池尻　友子	個人住宅	406.11
36	〃(97−C)	大蔵司三丁目213−3他	高槻市下水道部	下水道	103.40
37	芥川遺跡(97−A)	殿町88,92,92−1	須川　英男	宅地造成	2060.72
38	〃(97−1)	殿町70−1·2の一部	金森　雅樹·智恵子	個人住宅	141.39
39	高槻城跡(97−A)	野見町449−3	小野　幸雄	個人住宅	199.52
40	〃(97−B)	野見町1173−1他	マリア学院	園舎改築	266.30
41	〃(97−C)	大手町1168−2·5·6	上川　佳孝	個人住宅	315.79
42	〃(97−D)	大手町117−1·5·6	寺井　信吉	店舗	458.79
43	〃(97−E)	出丸町1244−12	釘島　宣彦	個人住宅	87.48
44	〃(97−F)	出丸町992−1·3·6	福地　尚	個人住宅	358.85
45	〃(97−G)	大手町1169−5	竹内　剛·孝子	個人住宅	118.18
46	〃(97−H)	野見町1492−1	大阪府警察本部	発電設備	15.00
47	〃(97−I)	八幡町地内	高槻市道路課	道路改良	1135.80
48	〃(97−J)	大手町3−1地先	高槻市街路課	道路改良	1380.00
49	〃(97−K)	出丸町992−1·3·6	小川　清孝　他	宅地造成	1038.02
50	〃(97−L)	出丸町1296他	野中嘉太郎	共同住宅	645.16
51	〃(97−M)	出丸町964−5·6	野中嘉太郎	共同住宅	891.48
52	〃(97−N)	八幡町1044−1	小川真喜代	個人住宅	222.66

表3　平成9年度調査一覧表(1)

担　当	調査期間	調　　査　　内　　容
宮　崎	9.3.28	地表下1.2mで地山(黄灰色土)確認　8世紀頃の土坑･柱穴数基、土師器･須恵器出土
橋　本	9.4.16～18	遺構面に達せず　遺物なし
川　村	9.4.21	地表下0.2mで地山(黄褐色土)確認　撹乱坑から須恵器等出土※
木　曽	9.5.12	地表下1.1mで地山(青褐色粘土)確認　遺構･遺物無し※
橋　本	9.5.30	史跡現状変更　掘削せず
鐘ヶ江	9.6.10～13	地表下0.9mで地山(黄褐色礫土)確認　柱穴･落ち込み等検出※
川　村	9.6.11	地表下2.0mで地山(灰白色土)確認　遺構･遺物無し※
木　曽	9.6.24	地表下1.55mで地山(青灰色粘土)確認　遺構･遺物無し※
川　村	9.6.26	地表下1.3mで地山(黄灰色粘土)確認　整地土から土師器出土※
宮　崎	9.7.1	地表下1.5mで包含層(暗褐色土:0.5m),地山(黄灰色土)確認　遺構･遺物無し
高　橋	9.7.25～8.5	史跡現状変更　遺構面に達せず　遺物なし
高　橋	9.8.1～5	史跡現状変更　遺構面に達せず　遺物なし
宮　崎	9.10.13～17	地表下0.5mで地山(黄褐色土)確認　溝(中世)･土坑･ピット等検出※
木　曽	9.10.20～31	地表下1.3mで地山(黄灰褐色砂礫)確認　弥生土器･土師器等出土※
橋　本	9.10.31	地表下2.0mで地山(青灰色砂質土)検出　遺構･遺物無し
橋　本	9.11.4～10	地表下1.25mで地山(黄褐色土)確認　包含層検出※
橋　本	9.11.11～19	地表下1.1mで地山(黄灰色砂)確認　遺構･遺物無し※
木　曽	10.11.18	史跡現状変更　遺構面に達せず
木　曽	9.12.15～26	地表下1.6mで地山(黄褐色砂質粘土)確認　遺構･遺物無し※
橋　本	9.12.24	史跡現状変更　遺構･遺物無し
木　曽	10.1.6～3.31	地表下1.0mで地山確認　遺構･遺物無し
木　曽	10.1.19～20	地表下0.65mで地山(青灰色礫)確認　遺構･遺物無し
宮　崎	10.2.9	地表下0.7mで地山(黄灰色粘質土)確認　遺構･遺物無し
橋　本	10.2.23～3.31	地表下0.9mで地山(青灰色砂礫)遺構･遺物無し
木　曽	10.3.9	地表下2.3mで地山(黄褐色土)確認　遺構･遺物無し
橋　本	10.3.11	地表下1.0mで地山(灰色粘土)確認　遺構･遺物無し
橋　本	10.3.19	史跡現状変更　盛土内の掘削　遺構･遺物無し
川　村	9.7.7	地表下1.7mで河床堆積(青灰色砂礫)確認　遺構･遺物無し※
川　村	9.7.7	地表下1.7mで河床堆積(青灰色砂礫)確認　遺構･遺物無し※
高　橋	9.7.29	地表下1.6mで河床堆積(灰色砂礫)確認　堆積層から土師器出土※
高　橋	9.8.19～9.30	地表下0.7mで河床堆積(褐色砂礫)確認　土師器出土
川　村	9.10.27～10.1.30	地表下0.9mで地山(暗茶褐色土)確認　遺構･遺物無し
木　曽	10.2.19～3.10	地表下2.2mで地山(灰褐色砂礫)確認　遺構･遺物無し
橋　本	9.9.4	地表下1.5mで地山(黄灰色砂質土)確認　遺構･遺物無し※
橋　本	9.9.4	地表下1.8mで地山(灰色粘土)確認　遺構･遺物無し※
木　曽	9.10.27～11.28	地表下2.3mで地山(黄褐色粘土)確認　遺構･遺物無し
橋　本	9.6.5	地表下0.7mで地山(青灰色砂礫)確認　遺構･遺物無し
橋　本	9.11.21～30	地表下0.45mで河床堆積(灰色砂質土)確認　遺構･遺物無し※
宮　崎	9.4.10	出丸外堀跡　地表下1.9mで外堀堆積土(暗青灰色粘土)を検出　弥生土器･土師器出土
鐘ヶ江	9.4.22	外堀跡　地表下1.8mで外堀埋土(青灰色土)検出、堀底は確認できず　近世井戸1基検出
川　村	9.5.29	地表下1.4mで外堀埋土(青灰色粘土)検出、堀底は確認できず※
木　曽	9.6.2～12	本書掲載
橋　本	9.8.8	地表下1.3mで外堀埋土(青灰色粘土)検出、堀底は確認できず※
宮　崎	9.10.1～9	地表下1.6mで外堀埋土(暗灰色粘土)検出、堀底は確認できず※
		開発中止
高　橋	9.10.7	三ノ丸跡　地表下1.5mで地山(黄褐色砂質土)確認　遺構･遺物無し
鐘ヶ江	9.10.27～10.3.31	外堀跡　整地土内の掘削のみ　遺構･遺物無し
鐘ヶ江	9.11.18～10.3.31	外堀跡　整地土内の掘削のみ　遺構･遺物無し
木　曽	9.12.11	出丸外堀跡　地表下2.3mで堀埋土(青灰色粘土)確認　堀底は確認できず
橋　本	10.1.22	地表下1.4mで外堀埋土(青灰色粘土)確認　遺物無し
宮　崎	10.2.5	出丸跡　地表下1.1mで地山(青灰色粘土)検出　遺構･遺物無し
鐘ヶ江	10.2.16	外堀跡　地表下1.8mで堀埋土(青灰色粘土)確認　遺構･遺物無し

No.	遺　跡　名(地区)	所　在　地	届　出　者	用　途	面積(m²)
53	高槻城跡(97−O)	野見町490−1,481	公益社	葬儀会館	1343.99
54	〃(97−P)	城内町1045−4	池田　朗	個人住宅	122.24
55	天川遺跡(97−A)	辻子一丁目2−3·4	佐々木輝男他	資材置場	561.99
56	〃(97−B)	須賀町294−19他	(株)裕成	分譲住宅	320.06
57	〃(97−C)	須賀町9−16他	東和開発(株)	分譲住宅	80.00
58	〃(97−D)	須賀町301−1	竹上　義弘	個人住宅	108.97
59	〃(97−E)	辻子一丁目2−14	佐々木輝男	道路	18.00
60	芝生遺跡(97−A)	芝生町一丁目地内	高槻市下水道部	下水道	60.38
61	〃(97−B)	芝生町四丁目372−1	高槻市教育委員会	休憩所	84.24
62	安満遺跡(97−1)	高垣町271	清水　武	個人住宅	965.00
63	〃(97−2)	高垣町263−1	清水　裕	個人住宅	347.00
64	〃(97−A)	八丁畷町410	米澤　操·郁子	農小屋	
65	〃(97−B)	八丁畷町395−2·3·4他	関西電力	電柱	7.00
66	〃(97−C)	八丁畷町12−1	京都大学	堆肥舎建設	180.00
67	〃(97−D)	八丁畷町1−22	関西電力	変電所設備	142.30
68	〃(97−E)	八丁畷町256−6他	高槻市教育委員会	フェンス	
69	〃(97−F)	八丁畷町392	平井　隆	農小屋	
70	〃(97−G)	八丁畷町393−1	吉田徳一郎	農小屋	
71	安満宮山古墳	安満御所の町1325−1他	高槻市公衆衛生課	墓園整備	98880.00
72	梶原寺跡(97−A)	梶原一丁目372−1	高槻市土地開発公社	フェンス	70.00
73	〃(97−B)	梶原一丁目373−1	サカイ興産(株)	共同住宅	316.04
74	〃(97−C)	梶原一丁目379他	高槻市公園課	フェンス	1029.00
75	梶原南遺跡(97−A)	梶原四丁目638−2	中尾　正秋	共同住宅	495.09
76	上牧遺跡(97−A)	上牧町五丁目482	関西電力	変電所設備	70.80
77	〃(97−B)	上牧町三〜五丁目地内	高槻市水道部	水道管	266.40
78	郡家本町遺跡(97−A)	郡家本町1562−4	中村　哲也	個人住宅	131.71
79	〃(97−B)	郡家本町1195	高槻市水政課	水路整備	170.40
80	〃(97−C)	郡家本町34−7	高槻市道路課	道路整備	50.50
81	郡家今城遺跡(97−A)	氷室町一丁目781−20他	室屋一成·小林賢三	個人住宅	122.43
82	今城塚古墳(97−A)	郡家新町666−1	高槻市教育委員会	整地	6.88
83	〃(第1次)	郡家新町692	高槻市教育委員会	規模確認	190.00
84	氷室遺跡(97−A)	氷室町二丁目地内	高槻市下水道部	下水道	393.70
85	宮田遺跡(97−A)	宮田町三丁目89−1·3	畑中　ハルエ	共同住宅	968.33
86	〃(97−1)	宮田町三丁目89−2	畑中　敏夫	個人住宅	214.75
87	〃(97−2)	宮田町三丁目88−5	寒川團之輔	個人住宅	111.57
88	〃(97−B)	宮田町三丁目52−1	坂井　康彦	駐車場	528.00
89	津之江南遺跡(97−A)	津之江北町地内	高槻市道路課	道路	1441.00
90	〃(97−B)	津之江北町217他	ヤマモトハウジング	宅地造成	800.00
91	〃(97−C)	津之江北町217−1他	森上　幸治	賃貸住宅	994.72
92	〃(97−D)	津之江北町216−1	津田　貞子·勇　他	畑地造成	590.87
93	〃(97−E)	津之江北町216−6	中井　暲·中井よし子	畑地造成	656.32
94	土室遺跡(97−1)	上土室六丁目131−39·51	森　和夫	個人住宅	78.58
95	〃(97−A)	塚原五丁目地内	川本建設	分譲宅地	1481.63
96	新池遺跡(97−A)	上土室一丁目517−1	吉田和雄	共同住宅	672.00
97	中城遺跡(97−1)	昭和台町二丁目162	松本茂昭	個人住宅	93.07
98	〃(97−2)	昭和台町二丁目129	松村　洋	個人住宅	263.16
99	〃(97−3)	昭和台町二丁目162−2	森永武男·イツ子	個人住宅	129.73
100	〃(97−4)	昭和台町二丁目156−1	秋吉　広太	個人住宅	163.77
101	田能南遺跡(97−A)	大字田能小字岡崎6	高槻市建築課	校舎改築	4588.83
102	〃(97−B)	田能5−3,6−3	大阪府茨木土木事務所	道路	98.80

※は高槻市文化財調査概要ＸＸⅣ「嶋上遺跡群22」に掲載

表３　平成９年度調査一覧表(2)

担　当	調査期間	調　査　内　容
橋　本	10.2.19	出丸跡　地表下1.4mで地山確認　遺構・遺物無し
木　曽	10.3.10	外堀跡　地表下1.6mで外堀埋土(暗青灰色粘土)検出　遺物無し
橋　本	9.6.19	地表下0.3mで包含層(淡褐色土:0.2m)確認、地山は黄灰色土　中世土器出土
橋　本	9.8.27	地表下0.7mで地山(黄褐色砂礫)確認　遺構・遺物無し
橋　本	9.8.27	地表下1.5mで地山(黄灰色砂)確認　遺構・遺物無し
		開発中止
橋　本	10.2.13	地表下0.45mで地山(黄灰色土)確認　包含層(淡褐色土)0.1m　遺構・遺物無し
橋　本	9.12.11～10.3.31	地表下1mで青灰色粘土(0.5m以上)確認　遺構・遺物無し
橋　本	9.12.24	遺構面に達せず　盛土の厚さ1.3m
宮　崎	9.5.9～6.25	方形周溝墓・井戸・土坑等検出　弥生土器・土師器・斎串等出土※
宮　崎	9.6.12～25	井戸・土坑・溝等検出　土師器・瓦器等出土※
橋　本	9.8.25	史跡現状変更　遺構・遺物無し
木　曽	9.9.18	耕作土内の掘削のみ　遺構・遺物無し
高　橋	9.10.16	遺構面に達せず　遺構・遺物無し
川　村	9.11.10～10.1.31	盛土1.2m　遺構・遺物無し
橋　本	9.12.2	史跡現状変更　耕土(0.3m)の掘削のみ　遺構・遺物無し
橋　本	10.1.22	史跡現状変更　耕土(0.3m)の掘削のみ　遺構・遺物無し
橋　本	10.1.27	史跡現状変更　耕土(0.3m)の掘削のみ　遺構・遺物無し
鐘ヶ江	9.7.3～10.3	本書掲載
木　曽	10.2.3～3.9	遺構面に達せず
宮　崎	10.2.23～27	柱穴・落ち込み検出　近世土師器・木製品出土
橋　本	10.3.3～31	掘削は盛土内(厚さ0.3m)　遺構・遺物無し
橋　本	9.12.22	地表下0.55mで地山(黄灰色砂質土)確認　遺構・遺物無し
川　村	9.11.10～10.1.31	盛土1.2m　遺構・遺物無し
橋　本	10.2.23～3.31	地表下0.3mで地山(青灰色土)確認　遺構・遺物無し
高　橋	9.3.28	地表下0.6mで包含層(黒褐色粘質土:0.1m)確認　地山は黄灰色粘土　ピット検出
宮　崎	10.1.19～3.31	地表下0.7mで地山(暗灰色砂礫土)確認　遺構・遺物無し
橋　本	10.1.20～3.31	地表下0.6mで地山(灰色土)確認　遺構・遺物無し
橋　本	10.3.10	地表下0.8mで包含層(淡褐色土:0.2m)・地山(黄灰色砂質土)確認　土師器出土
橋　本	9.7.14	史跡現状変更　掘削せず
宮　崎	9.11.6～9.12.26	内濠底幅22m、深さ2.0m　円筒埴輪・石棺・木製品出土　戦国期堀跡検出
川　村	9.6.23～10.2.27	地表下1.8mで地山(灰褐色土)確認　遺構・遺物無し
橋　本	9.5.19	表土下0.6mで地山(黄灰色土)確認　遺構・遺物無し
高　橋	9.6.17	地表下0.5mで地山(淡灰褐色粘質土)確認　包含層・落ち込み検出※
高　橋	9.7.7	地表下0.1mで地山(淡黄灰色粘土)確認　溝(近代)検出※
橋　本	9.12.3～18	本書掲載
高　橋	9.10.27～10.1.30	本書掲載
高　橋	10.1.26～2.17	本書掲載
高　橋	10.2.12～3.23	本書掲載
宮　崎	10.3.9～3.31	本書掲載
宮　崎	10.3.11～3.31	本書掲載
高　橋	9.4.18	地表下1.4mで地山(黄褐色粘土)確認　遺構・遺物無し※
橋　本	10.2.18	試掘調査　地表下0.4mで包含層(褐色土:0.2m)確認　地山は黄褐色砂礫　弥生土器出土
宮　崎	9.7.15～24	本書掲載
木　曽	9.4.28	地表下0.5mで地山(黄褐色礫土)確認　遺構・遺物無し※
高　橋	9.4.30	地表下0.6mで地山(明黄褐色砂質土)確認　遺構・遺物無し※
木　曽	9.6.30	地表下0.3mで地山(黄褐色礫土)確認　遺構・遺物無し※
木　曽	9.11.20	地表下0.4mで地山(黄褐色礫土)確認　遺構・遺物無し※
高　橋	9.7.14～18	地表下3.0～3.5mで地山(黄灰色土)確認　遺構・遺物無し
橋　本	10.1.5～6	地表下1.8mで地山(青灰色砂礫)確認　遺構・遺物無し

まとめ

今回の調査では井戸や土坑などを検出したものの絵図等にある武家屋敷などの遺構を知るにはいたらなかった。むしろ、近世の地山に含まれる後期の弥生土器は風化もあまり受けていない。一帯は弥生時代前期からの遺物が出土するものの、これまで明確な遺構は確認しておらず、出土した弥生土器は周辺に何らかの遺構の存在を予見するものであろう。

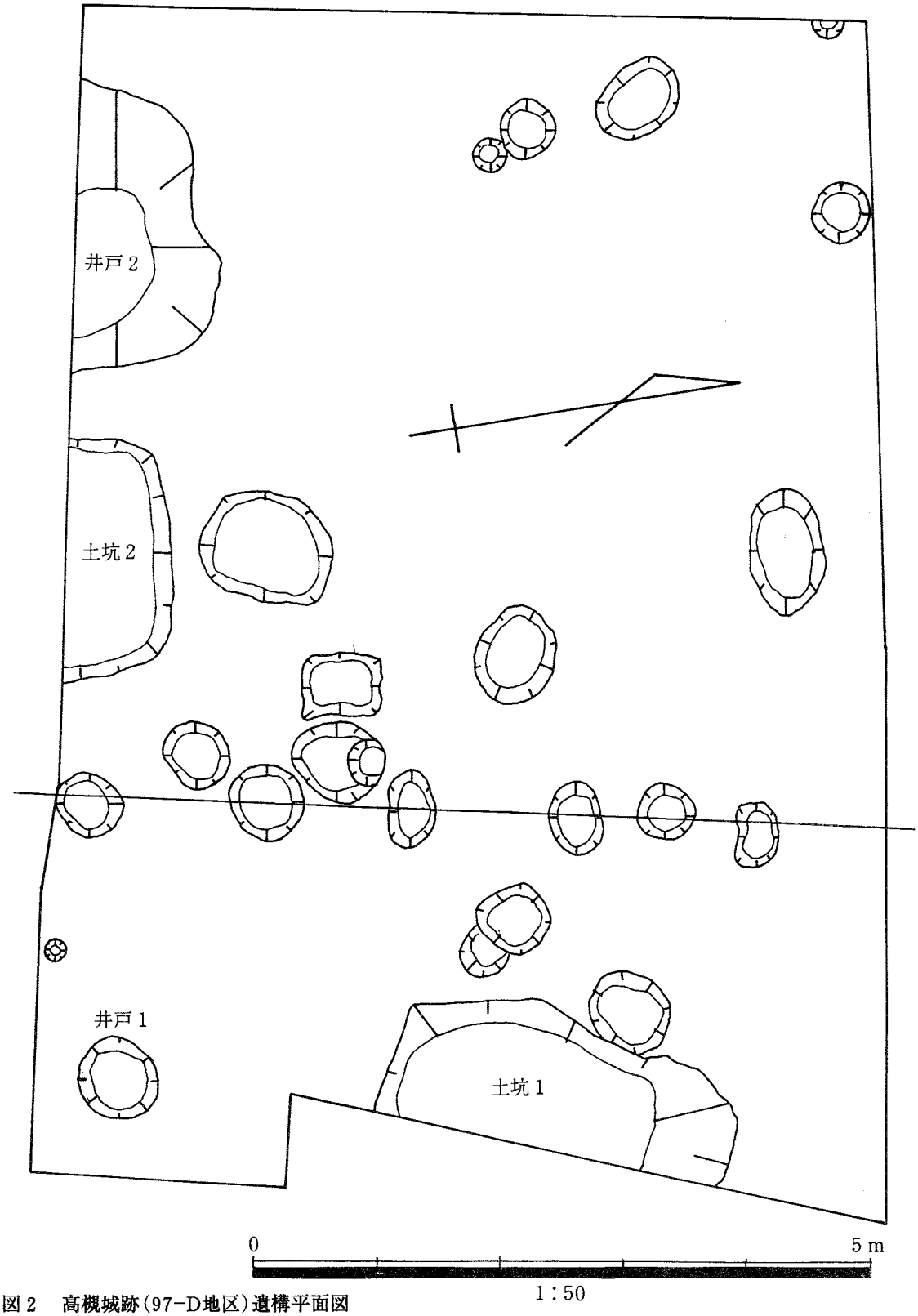


図2　高槻城跡（97−D地区）遺構平面図

宮田遺跡の調査

橋本久和
高橋公一

宮田町三丁目に所在する宮田遺跡では、平安時代末期から鎌倉時代にかけての集落跡が継続的に調査されている。平成９年度に調査を実施した地区は、昭和46年度に溝や柵で区画された屋敷地が検出された調査区の西側にあたる。当調査区の北側隣接地では昭和62年度に、平成５年度には東側の隣接地で調査を実施している。当調査区を含め、いずれの調査区からも建物跡や井戸などが検出されており、集落の拡がりを確認することができる。ここでは、未報告の平成５年度の調査区（１区とする）と平成９年度に実施した調査区（２区とする）の概要について報告する。

図１　調査位置図

遺構・遺物（図版第２・３）

両調査区はもともと同一の水田であり、基本的な層序は耕土（0.2m）・床土（0.1m）を除去すると灰白色砂質土となる。この灰白色砂質土が当調査区周辺の地山であるが、２区の中央部から南側にかけて若干の土器を含む褐色土が地山上面に認められ、２区南端で約0.1mを測る。検出された遺構は建物・柵列・井戸・溝などがあり、主な遺構について概要を記しておく。

１区・２区とも調査区の中央部に柱穴が密集しているが、２区の西端と南端ではほとんど検出されなかった。建物として復元できたのは４棟である。建物１と建物２は前後関係は不明であるが、西側に庇が付く建物としてほぼ同じ場所で建てかえられたものである。建物１は桁行２間（4.5m）・梁間２間（4.0m）で、桁行柱間はそれぞれ2.0mである。西側に柱間1.5mの庇が付く。建物２も西側に柱間２mの庇が付き、桁行２間（5.6m）・梁間２間（３m）を測る。建物３は桁行３間（3.5m）・梁間１間である。梁間の柱間は西側で2.5m、東側で2.7mを測る。建物４は桁行２間（4.6m）・梁間３間（3.9m）である。柵列は建物１～３の東側でＴ字状に、建物４の東南ではＬ字状に検出されている。

井戸は４基検出された。井戸１は底部に曲物を据えるもので、長径２m・短径1.6m・深

図2　宮田遺跡遺構平面図

さ１ｍを測る。井戸２は深さ2.3ｍの石組井戸で、掘り方の長辺2.4ｍ・短辺1.9ｍを測る。井戸３・４はいずれも、直径約２ｍ・深さ約0.8ｍを測る。井戸３は調査途中で原位置ではないが枠材の断片が出土した。井戸２からは枠材らしきものは出土しなかった。また、井戸３・４では方形の磚が数点出土しているが、周辺の遺構精査中にも破片が出土している。昭和62年度の調査では底部に２段の磚を積んだ井戸が検出されており、井戸３・４も磚を使用していたものとみられる。

数本の溝が検出されている。溝１は１区から２区にまたがって直線的に掘削され、２区で幅１ｍ・深さ0.5ｍ、１区で幅0.7ｍ・深さ0.2～0.3ｍを測る。溝２は幅0.6～１ｍ・深さ0.2ｍでほぼ直線的に掘削されている。いずれも、調査区を斜めに横断するように掘削されている。溝３は幅１ｍ・深さ0.3ｍで方形に掘削され、内側で16.5ｍを測る。重複関係から溝１より新しいことが確認できる。

井戸や溝からおおむね、12世紀から13世紀にかけての瓦器椀、土師器皿・杯、磚・中国製陶磁器などが出土している。

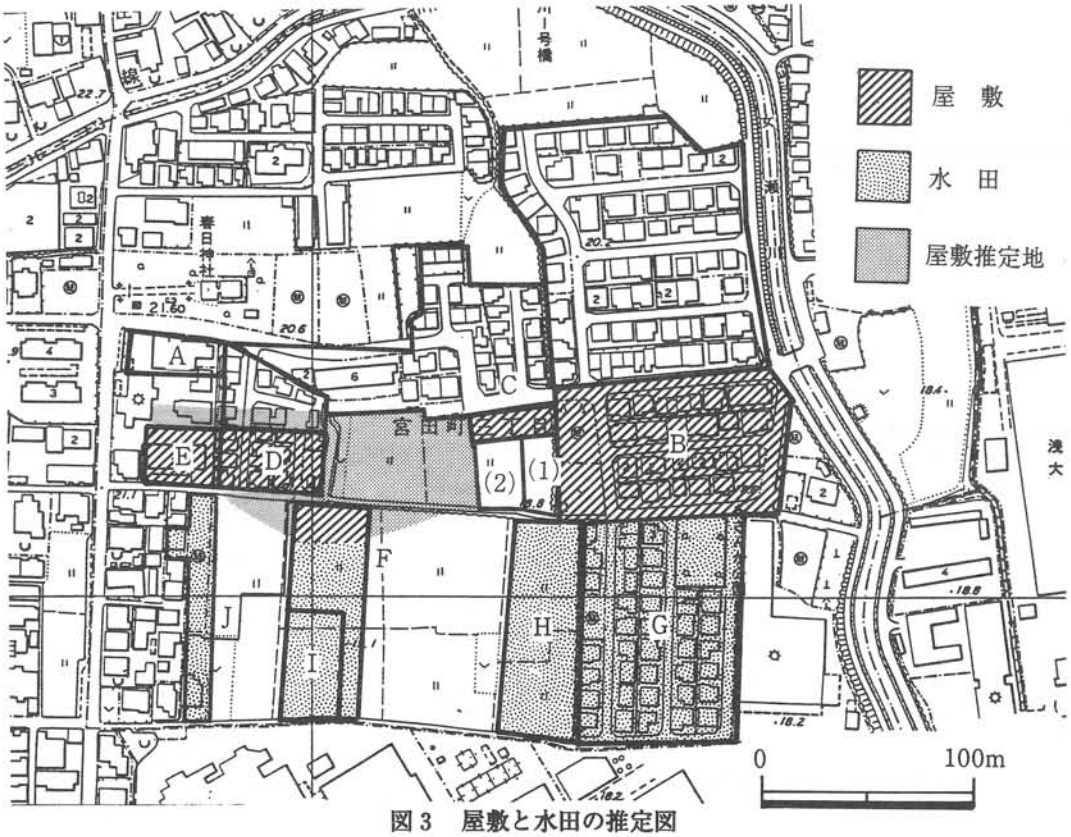


図３　屋敷と水田の推定図

まとめ

宮田遺跡におけるこれまでの主な調査区を図3にまとめた。B・C・D・EとF区の北端で屋敷跡とみられる建物や井戸などが検出されている。B区は東西約20mを1単位とすることが知られているが、今回報告した二つの調査区とB区との境にあたる東側未調査部分を合わせると東西約40mを測る。また、C区の北側では遺構がほとんど検出されず、2区南端でも柱穴がほとんどみられない。このため、遺構が検出されるのは南北40～45mとみられる。B区西端では柵列を境に北側に倉とみられる建物が、南側では比較的小規模な建物が何棟か検出されている。1区・2区では北側に磚を使用した井戸が3基検出され、南側では溝3に囲まれた方形区画がみられるなど柵1を境にして南と北の屋敷地が存在した可能性があり、南北も20m程度とみられる。なお未調査地域が残るが、E区の西端まで約300mを測り、東西15単位の屋敷地が想定され、屋敷地の検出された南側のF・G・H・I・J区では遺構が検出されず水田が営まれたものとみられる。

1区・2区やB・D・E区は出土遺物から12世紀を中心にするが、11世紀の遺物や遺構はA区とF区の一部に限られる。また、溝1は出土遺物が少なく、詳しい時期を特定できないが溝3や柱穴より古い時期に属す。調査区を斜めに横断する溝1に類似する溝はF区やD・E区でもみられるが、南北方向に合致した溝や柵で区画された屋敷地の出現によって埋められたものとみられる。これまでに検出された建物などは嶋上郡11条7里4・5・6坪の南半部を占め、1区・2区南側の里道は11条7里4・5・6坪と7・8・9坪との坪境にほぼ相当するため、条里区画に沿った計画的屋敷地が12世紀に出現したものとみられる。

新池遺跡（97ーA地区）の調査

宮　崎　康　雄

新池遺跡は高槻市西部の段丘上にひろがり、1988～90年にかけて実施した調査によって日本最古・最大級の埴輪生産遺跡であることがあきらかとなったほか、７世紀後半の集落や新羅土器を検出し、1991年には今城塚古墳附新池埴輪製作遺跡として史跡指定をうけた。

今回の調査地は指定地から谷を挟んだ約80m西方にあたる。平成７・８年度には北側隣接地が調査され、６世紀前半頃の埴輪工房や８世紀後半頃の掘立柱建物を検出している。一帯は南へ緩やかに下降する段丘となっており、現状は田である。開墾時の整地によって北半部は削平をうけ、南半部は盛土がなされていた。耕土・整地土を除去するとすぐに黄灰色土の地山となり、包含層等は存在しない。

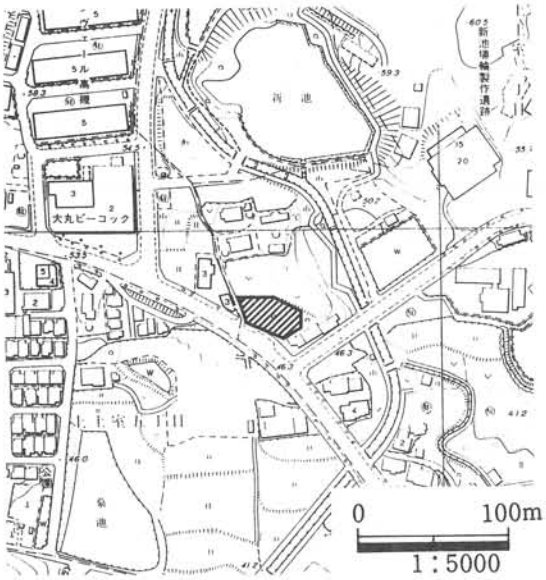


図1　新池遺跡調査位置図

遺構・遺物（図版第４）

検出した遺構は掘立柱建物・溝・土坑およびピットである。これらの遺構は平成７・８

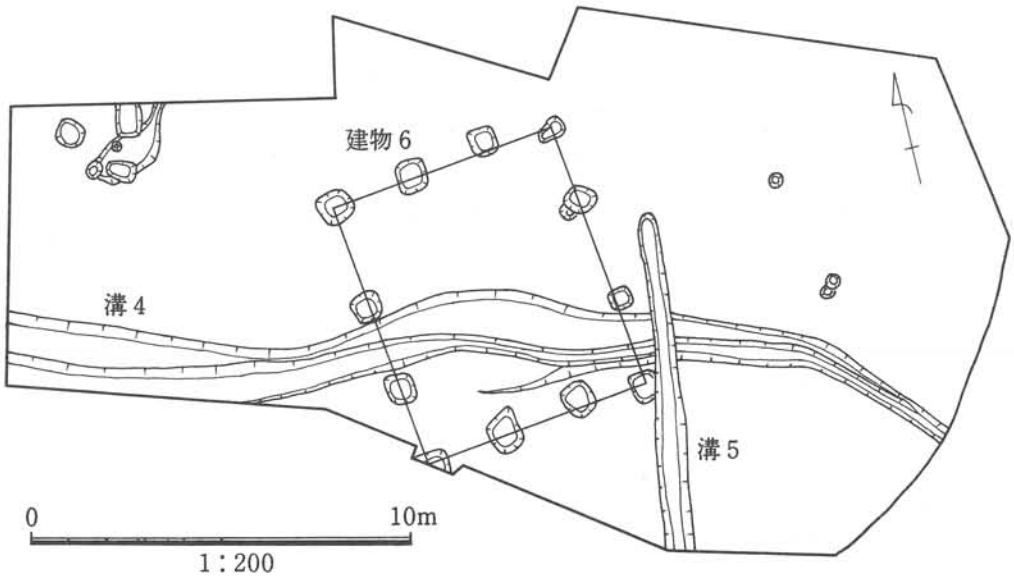


図２　調査区平面図

年度の調査地で検出した遺構と一連のものと考えられるため、遺構の番号はこれらに連続したものとした。以下、各遺構の概略を記す。

建物６は調査区中央に位置する南北棟である。桁行３間（7.2m）、梁行３間（6.2m）をはかり、方向はN7°Wである。柱穴は一辺0.5m～0.8mの方形をなし、深さは0.2m～0.8mをはかる。いずれも柱根は遺存しない。

溝は２条検出した。溝４は等高線に沿ってゆるやかに蛇行しながら調査区を東西に貫く。断面の形状は二段に掘り込んだ逆台形状をなし、幅1.2m、深さ0.7mをはかる。埋土は上下二層あり、上層は灰褐色土、下層は暗褐色土である。遺物は少なく、上層より13世紀頃の土釜片が出土した程度である。建物６を切る。

溝５は調査区中央を南北にのび、南側は調査区外へと続く。北端は削平のために途切れていた。断面の形状は逆台形を呈し、幅0.4m、深さ0.2mをはかる。埋土は暗灰色土である。溝４を切る。

まとめ

今回の調査で検出した掘立柱建物は規模や形状から倉庫と考えられる。出土遺物がないものの、市内で検出した掘立柱建物の方向から判断すれば８世紀中～後半頃と考えられる。北側隣接地で検出した８世紀後半頃の５棟の建物に同じ方向があることや、ともに倉庫で構成されることなどから、両者が一体となって存在した倉庫群であったといえる。

丘陵部に存在する掘立柱建物としては本遺跡以外にも古曽部・芝谷遺跡、紅茸山遺跡などが知られる。いずれも出土遺物が極端に少ないという共通性がみられ、今回の調査例をふくめて律令期の建物のあり方を考えるうえでも重要である。

また、埴輪工房については、関連する遺構・遺物ともまったく検出しなかったが、隣接地の調査結果からすると今後の周辺での調査が期される。

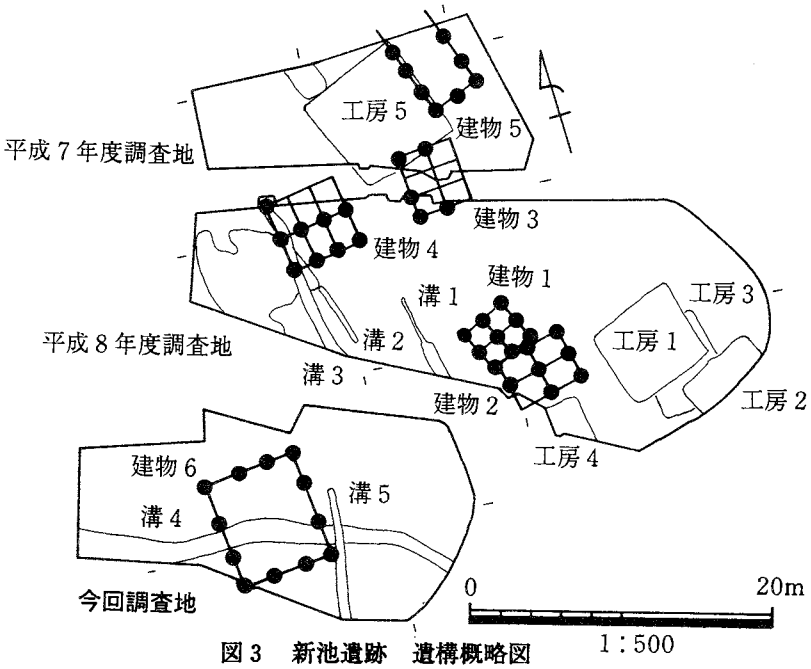


図３　新池遺跡　遺構概略図

津之江南遺跡の調査

高　橋　公　一
宮　崎　康　雄

津之江南遺跡は芥川と女瀬川の合流点に近い標高10m前後の低位段丘南端にひろがる。昭和47年には津之江小学校建設、昭和61年には水路整備に先立って調査を実施し、弥生時代前期の土坑、後期の竪穴住居６棟や古墳時代の木棺墓、平安時代の掘立柱建物、鎌倉時代の井戸などを検出したほか、旧石器時代の石器類や礫群、および接合資料などの遺物は良好な資料として知られている。

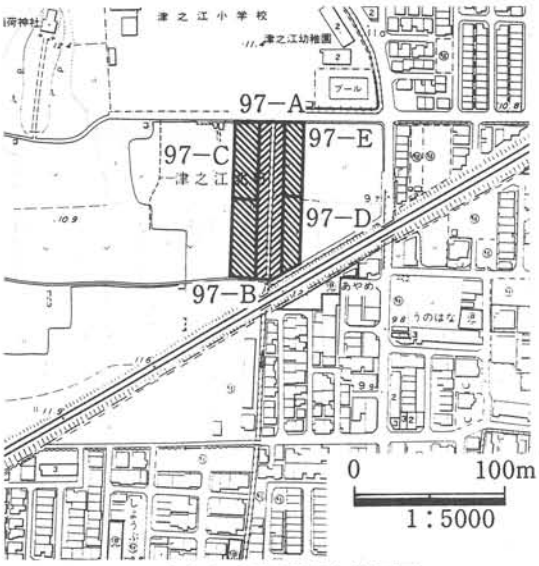


図１　津之江南遺跡調査位置図

今回報告するのは平成９年度に実施した５件の調査である。これらはすべて昭和61年の調査区（86－１地区）に隣接するうえ、同一の遺構を検出していることから、一括してその概要を述べる。また、前記の理由から遺構番号は86－１地区に引き続いて付している。

遺構・遺物（図版第５～11）

検出した遺構は、弥生時代の竪穴住居、古墳時代の井戸・土坑、鎌倉時代の掘立柱建物・井戸などである。

竪穴住居は13棟検出し、うち３棟は86－１地区で検出した竪穴住居を再確認することができた。調査地の北西部に集中する傾向があり、平面形は円形と方形が混在する。うち住居９・12は多角形とみられる。時期は弥生後期後半である。住居３では南壁に接した土坑内に焼土・炭が充満し、中央には完形の近江形鉢を据えていた。全体的に遺物は乏しいものの、住居13では廃絶後間もなく投棄された50個体以上の弥生土器を検出した。

掘立柱建物は97－Ｄ地区南端部で２棟検出した。

建物１は南北３間（7.5m）、東西２間以上（2.0m以上）の南北棟であり、東側は調査区外へつづく。柱穴は直径0.3m前後の円形で柱根等は遺存しない。方向はN8°Eである。時期は柱穴の出土遺物から11世紀後半とかんがえられる。

建物２は南北３間（5.5m）、東西２間以上（3.4m以上）の南北棟である。建物１と一部

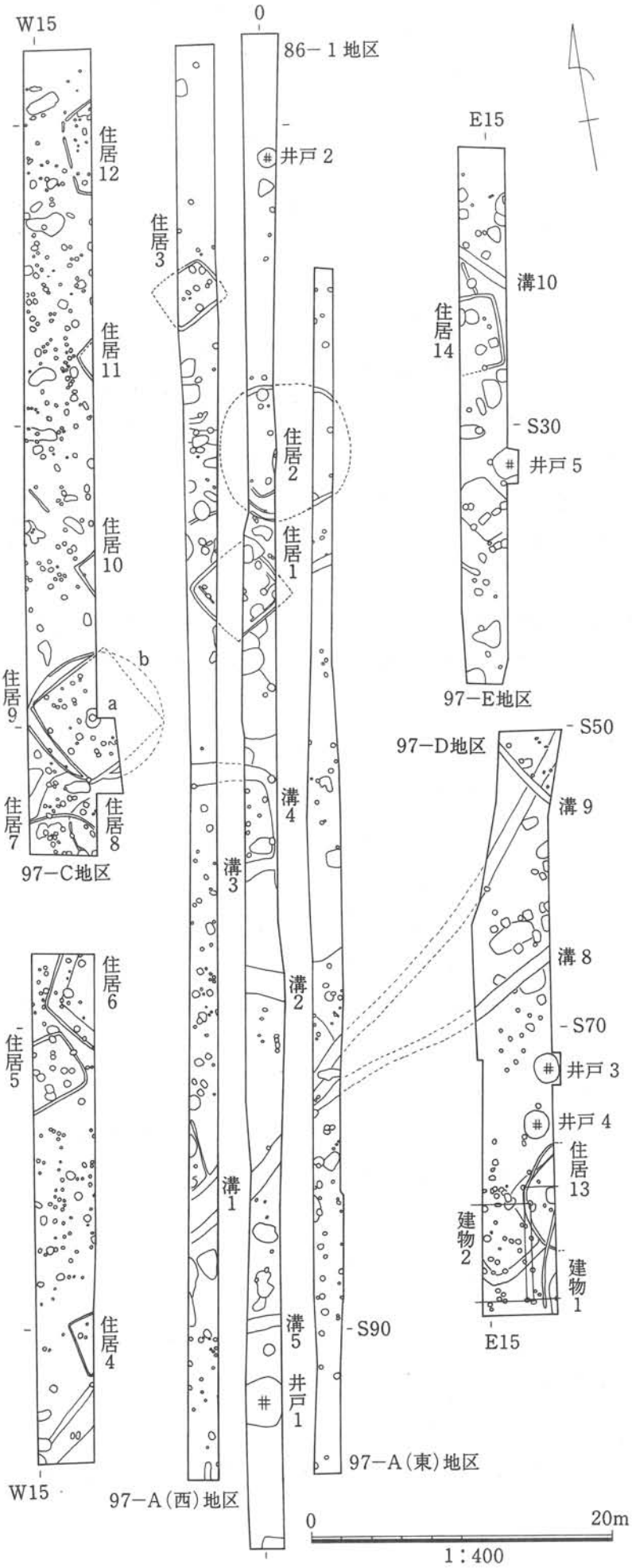


図2　津之江南遺跡　遺構概略図

が重複し、西側は調査区外へとつづく。柱穴は直径約0.3mの円形をなし、南北柱列の方向はN8°Eを示す。時期は11世紀後半である。

井戸は97－D・E地区で3基を確認している。井戸3は97－D地区中央部で検出した。掘形の平面形は直径1.8mの円形をなし、深さは1.2mである。井戸枠等は廃棄時に抜かれたらしく遺存しなかった。底付近からは11世紀後半頃の土師器、瓦器が出土した。

遺構名	平面形	大きさ
住居1	方形	5.1m×5.2m
住居2	円形	直径9.5m
住居3	方形	3.4m×4.3m
住居4	方形	3.8m×1.7m以上
住居5	方形	4.3m×4.4m以上
住居6	多角形	一辺4.2m以上
住居7	隅丸方形	3.4m以上×4.7m以上
住居8	方形	3.4m以上×3.0m以上
住居9a	方形	6.5m×6.5m
住居9b	円形	直径8.2m
住居10	方形	1.8m以上×2.5m以上
住居11	方形	1.6m以上×1.9m以上
住居12	多角形	一辺4.9m
住居13	円形	直径6.8m
住居14	方形	4.9m×3.0m以上

表1　竪穴住居一覧

井戸4は井戸3の南側にあり、平面形は直径1.8mの円形をなす。深さは1.0mをはかり、井戸枠等は遺存しない。底から11世紀後半頃の瓦器が出土した。

井戸5は97－E地区中央部にある。掘形は直径1.8mの円形をなし、深さは0.9mをはかる。内側には広葉樹をくり抜いた井戸枠を据えていた。枠は内径約0.3m、現存高0.64mをはかる。枠内底付近からは5世紀中～後半頃の須恵器とともに竪櫛が1点出土した。

まとめ

今年度の調査は遺跡の東半部を南北に貫くかたちとなり、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物を検出し、あらたな知見を得た。

弥生時代では、前・中期の遺構や遺物こそなかったものの、後期後半の竪穴住居を多数検出できた。今年度と86年度の調査分に北側の津之江小学校地区の調査例を含めると、住居の数は17棟を数えることとなり、これらが広範囲に分布することからすれば、総数はかなりの数となると想定できる。平面形は方形のほか、円形や多角形など多様であるが、これらは基本的に等高線に沿って築かれたようである。このほか、溝3・4などのように方形周溝墓とみられる遺構も存在することから、長期にわたる定住がなされたと想定されよう。このほか、住居5で検出した土坑が竈であれば最も古い例のひとつにあげることができる。

古墳時代では、井戸5にみられるように5世紀代が中心となる。遺構や包含層からの出土遺物には初期須恵器も含まれており、比較的早い段階から展開していたといえる。各調査区で検出した柱穴には等高線に平行もしくは直交するように、北西や北東方向に並ぶものがある。これらは建物としてまとまるようであり、掘立柱建物を中心に構成された集落

となる。

奈良・平安時代の遺構は皆無に等しい。周辺調査区では10世紀頃の掘立柱建物や井戸を調査しているが、今回明確なものは検出していない。遺物に関しては越州窯系青磁椀が特筆できる。11世紀後半になると、掘立柱建物や井戸などの遺構や遺物が豊富にみられるようになる。この時期の建物は古墳時代とは異なり、南北方向に柱筋を向けて並ぶ。

以上、今回の調査を概観したが、津之江南遺跡は長期にわたって展開し、その内容もこれまでの予想以上に豊富であった。周辺地域での調査は始まったばかりであり、今後の進展にともない、遺跡の内容はより豊かなものとなろう。

安満宮山古墳の調査

鐘ヶ江　一　朗

安満宮山古墳は古生層を基盤とする安満山の南斜面の中腹に位置する。眼下には安満遺跡がひろがり、その南には山城盆地から大阪湾へと注ぐ淀川の流れが一望できる。

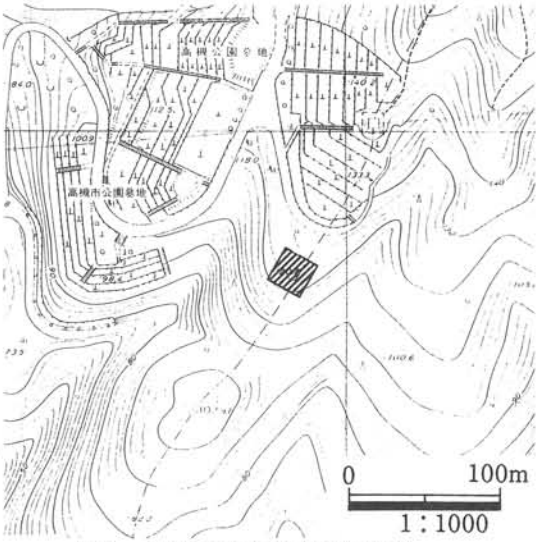


図１　安満宮山古墳調査位置図

遺　構（図版第12）

古墳は幅20～30mのきわめて狭く、急峻な南西方向の尾根上に立地する。標高約125mをはかり、平野部との比高は110mである。南北約21m、東西約18mの不整な方形墳で、墓坑の北側で盛土の一部が遺存する以外はすでに流失していた。埴輪列・葺石等の外表施設は認められなかった。中央には尾根筋に直交するかたちで墓坑が設けられていた。規模は東西約7.5m、南北約3.5m、現存する深さ0.3～0.4mをはかり、主軸方位はN—44°—Wを示す。坑底周縁には幅0.15～0.3m、深さ0.1mの排水溝が巡り、拳大よりやや大きい割石や河原石を充填していた。墓坑の中央には上縁長5.5m、同幅1.3m、深さ1.2mの木棺埋納坑があけられ、底にはほぼ一面に朱が認められた。水平な坑底に接して割竹形木棺を埋置し、東西両端部には棺を支えるために扁平な割石を数個ずつ差し込んでいた。木棺は大部分が腐朽消失するものの、棺材の遺存状態から直径約0.8m、長さ約５mに復元できる。

木棺内からは東半部から５面の青銅鏡と1000点以上のガラス小玉、西半部からは鉄製品が９点出土した。鏡は２グループに分けて置かれていた。第一のグループ（１～３号鏡）は墓坑東端から約1.2m離れた木棺部中央で、３面が上から１・２・３号鏡の順に重なっていた。１号鏡は鏡背面を上に向けて麻布でくるまれ、２・３号鏡は鏡面を上にしてあった。第二のグループは第一のグループの約0.2m西側にあり、上に４号、下に５号を直接重ね、ともに鏡背面を上に向けていた。ガラス小玉は４・５号鏡のすぐ西側で２ヶ所に分かれてまとまっていた。鉄製品には鉄刀や農工具があり、墓坑の西端から約１m東側、棺西部の南辺にまとめておかれていた。

これらの副葬品出土状況からすれば、被葬者の頭位は東と考えられる。

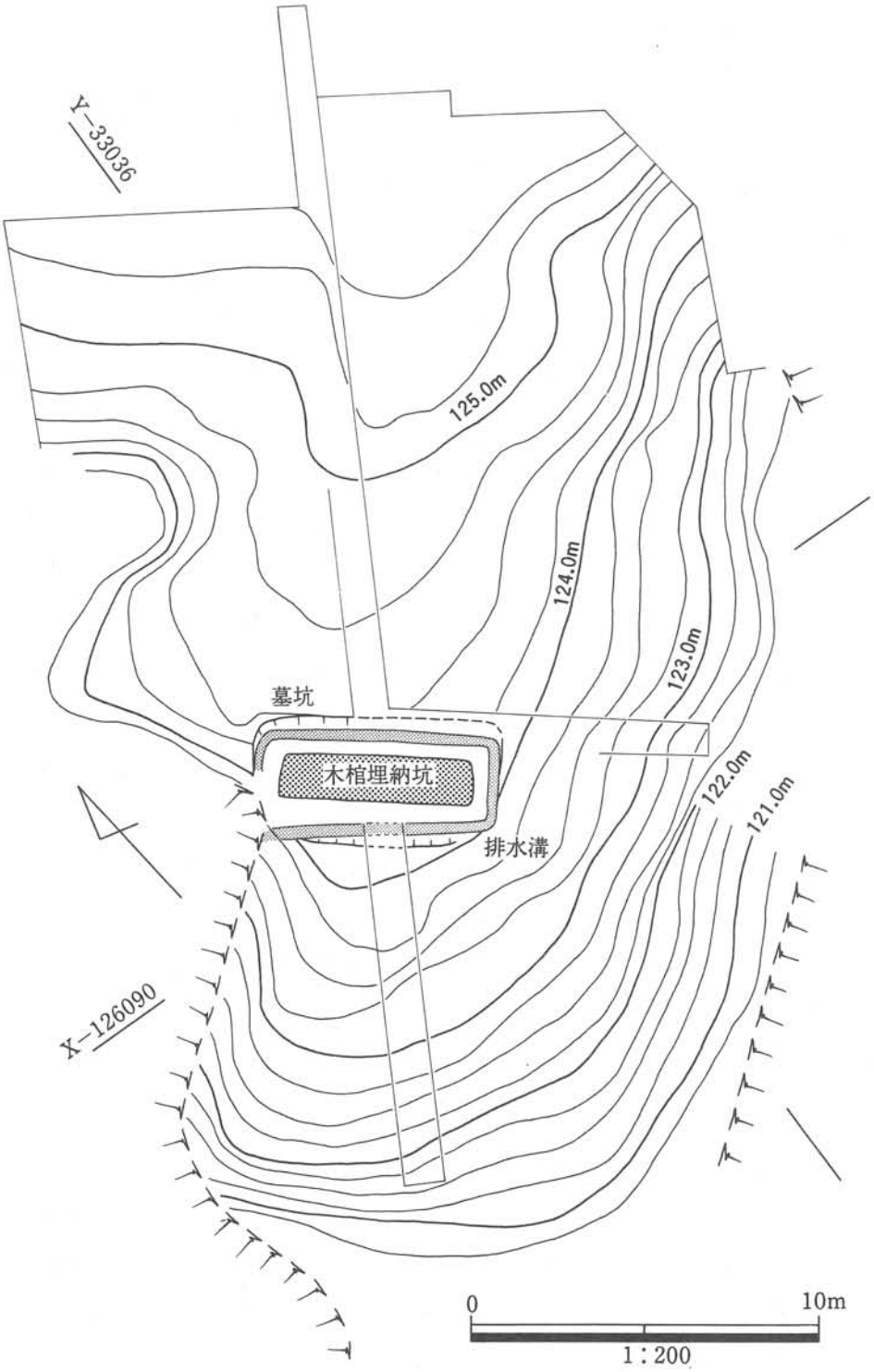


図2　安満宮山古墳測量図

遺　物（図版第13・14）

出土した副葬品は青銅鏡５面、ガラス小玉1000点以上、鉄製品９点である。

１号鏡は三角縁「吾作」四神四獣鏡で、鈕座に小突起をもち、鈕孔断面はやや長方形と

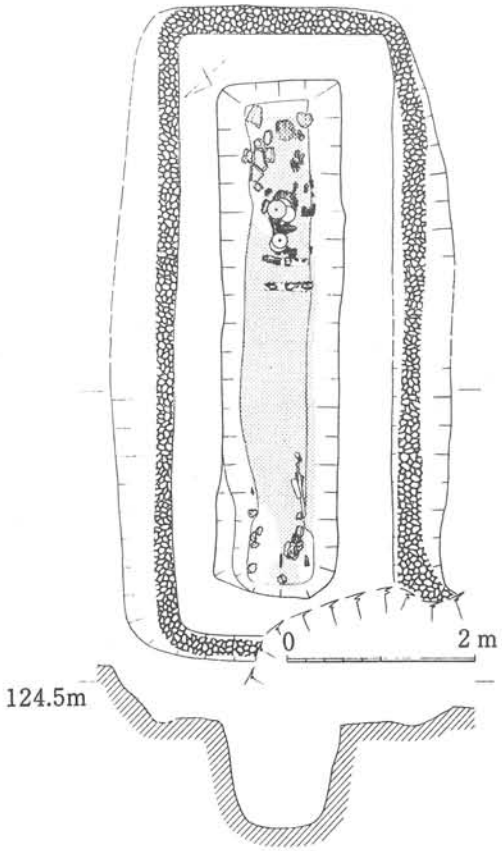


図3　墓坑平面図・断面図

なる。内区中央寄りに4つの乳を配す。図像はやや不鮮明ながら四神が描かれる。銘帯には「吾作明鏡　錬取好同　文章皆　其師□工　上有東王父西王母　師子辟邪甚　□巨□□□　□□□不老　吏人得之　位至三公　甚楽兮」と46字の銘文が記される。直径21.8cmをはかる。

2号鏡は「青龍三年」方格規矩四神鏡で、扁平な半球状の鈕の周囲を方格で区画し、内部には直線的な文字で十二支を配している。鈕孔断面は長方形である。内区には「玄武」「青龍」「朱雀」「白虎」の四神と瑞獣を置き、四方の要所にＴＶＬ字形の規矩文を配している。Ｌ字は正Ｌ字形である。外区は鋸歯文＋珠点付複波文＋鋸歯文で構成される。銘文は右回りに39文字「青龍三年　顔氏作鏡成文章　左龍右虎辟不詳　朱爵玄武順陰陽　八子九孫治中央　壽如金石宜候王」と記す。直径17.4cmをはかる。同型鏡に京都府大田南5号墳の「青龍三年鏡」がある。

3号鏡は三角縁「天・王・日・月・吉」獣文帯四神四獣鏡である。内区内側に2体ずつの神像と獣像を交互に配置した複像式で、神像の間には笠松文様を配している。各乳の下半には7つの鋸歯文をまく。獣文帯は方格と小乳で10区に分けられ、方格には「天・王・日・月・吉」銘が時計回りに一字ずつ鋳出される。外区には鋸歯文と珠点付の波文を配し、外周突線が認められる。直径は22.5cmである。

4号鏡は斜縁「吾作」二神二獣鏡である。内区に二神二獣を置き、東王父と西王母には侍仙がともなう。外区には鋸歯文の間に菱形珠点付複波文が配され、外周突線も認められる。銘帯は「吾作明鏡自有己　青龍白虎居左有　令人長命宜子孫　作吏高遷　車生栄耳作師長命吉」の34字が時計回りに記される。直径は15.8cmである。

5号鏡は「陳是作」半円方形帯同向式神獣鏡である。内区には「伯牙」「東王父」「西王母」「黄帝」の神像といくつかの獣形を配する。銘文は左回りに「陳是作鏡　君宜高官〔官は逆字〕　保子宜孫　萬年」と14文字を記し、外区は鋸歯文と複波文で構成する。直径は17.6cmである。

ガラス小玉はスカイブルーを呈し、直径３～４mmをはかる。一部に棺長軸方向の連接状態をとどめている。

鉄製品には刀・刀子・板状鉄斧・有袋鉄斧・ヤリガンナ・鑿・鎌がある。刀(1)は全長68.0cm、刃部長55.0cm、幅2.5cm、厚さ0.6cmをはかる。刀子は２点ある。(2)は全長9.6cm、刃部長6.8cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmをはかる。(3)は全長10.4cm、幅1.1cm、厚さ0.35cmをはかる。鉄斧は２点出土した。板状鉄斧(4)は全長23.0cm、幅7.3cm、厚さ1.1cmをはかる。(5)は有袋鉄斧である。全長11.4cm、幅4.2cm、厚さ0.35cmをはかる。ヤリガンナは２点ある。(6)は全長23.1cm、幅0.75cmをはかり、厚さは0.35cmである。(7)は全長26.9cm、幅0.8cm、厚さ0.5cmをはかる。鑿(8)は全長20.5cm、幅・厚さとも1.0cmをはかる。鎌(9)は全長14.1cm、幅3.9cmをはかり、厚さ0.45cmをはかる。

まとめ

安満宮山古墳は、安満山古墳群内の公園墓地拡張計画に伴う確認調査で発見した古墳である。古墳の所在する尾根の麓には、この山塊を神域と仰ぐ春日神社（現・磐手杜神社）が鎮座し、その前面に安満遺跡がひろがる。まさしく安満の首長の奥津城にふさわしい位置を、この古墳は占めている。そこで古墳の調査を進めるにあたって、安満遺跡との関連を念頭に山麓の神社両隣にのこる小字・宮山を付し、あらたに安満宮山古墳と命名したものである。

調査の結果、盛土の大半は消失していたが、埋葬施設については、木棺埋納坑が墓坑底面からさらに深く掘られていたことによって遺物の遺存状況は極めて良好であった。副葬された５面の青銅鏡は２号鏡をはじめとしてすべてが舶載鏡とみられ、３世紀前半の限られた時期に製作されたと考えられる。これまで、景初３年の卑弥呼朝貢に対して魏から与えられた『銅鏡百枚』は三角縁神獣鏡を中心に考えられてきたが、今回の一括出土によって「青龍三年」鏡や同向式神獣鏡もその下賜品とみることが可能となってきた。

安満宮山古墳の築造年代については、伝世鏡を含まないことや墓坑の形状、鏡を積み重ねる埋納法などが古墳祭祀の定型化以前の手法とみることもできることから、３世紀の第３四半期の極めて早い段階と考えられる。瀬戸内に通じる淀川に面した三島の地で発見された安満宮山古墳は、今後の邪馬台国論に大きな影響をあたえることになろう。

なお出土した青銅鏡５面・ガラス小玉・鉄製品などは、平成10年３月９日付で一括して国保有の文化財となっている。

また安満宮山古墳は現地保存がなされ、平成10年度に市制施行55周年記念事業として復元整備工事を行って平成10年12月11日に竣工し、一般公開している。この整備工事に伴う報告書等は平成11年度を予定している。

今城塚古墳規模確認調査

宮　崎　康　雄

今城塚古墳は三島平野の中央部に位置する６世紀前半頃の淀川北岸で最大の前方後円墳である。墳丘は地形を利用して東西方向に築かれ、周囲には二重の濠が巡る。「今城」の名は戦国時代に城砦として利用されたことに由来し、墳丘や濠は大規模な改変を受けている。

平成８(1996)年には築城による古墳の形状変化を把握するための測量調査をおこない、詳細な平面図を作成した。その結果、古墳の規模は全長350m、全幅342m、墳丘長186mをはかり、後円部は直径100m・高さ11m、前方部は幅141.5m・高さ12mであったことが想定可能となった。内堤では埴輪列を確認したほか、武人や家形埴輪が発見された北中央部は堤の幅を約６m拡張しており、祭祀場であったと考えられる。平成９（1997）年度からは今城塚古墳の保存整備に必要な各部のデータを得るために、平面図をもとにした規模確認調査を実施し、後円部北東側内濠の幅・深さ・形状やその埋没状況、墳丘・内堤それぞれの基底部の状況把握に努めた。併せて墳丘の分布調査も実施した。

図１　今城塚古墳　調査位置図

遺構・遺物（図版第15～17）

＜遺　構＞

今回の調査では内濠の規模を確認したほか、葺石や溝、戦国期の堀などを検出した。

内濠は底幅約20m、深さは現地表面から2.5mをはかる。断面の形状は逆台形をなし、層序は上から耕作土（0.2m）、埋積土（1.3m）、堆積土　（1.0m）に大別でき、堆積土はさらに上中下の３層に分かれる。各層からは円筒や朝顔形などの埴輪片が出土したほか、下層では木製のナスビ形鋤を検出した。上層では白色及びピンク色の凝灰岩が数点出土したほか、最上位からは12～13世紀にかけての瓦器椀を検出した。

埋積土は一辺２～３mの直方体ブロックを墳丘側から内堤側にむけて一気に落とし込んだ状況を示していた。このブロックには縦・横とも約0.4m、厚さ0.1mほどの小土塊を重ねた鱗状の層序がみられ、墳丘本来の盛土を切り出したとかんがえられる。このブロック土は現況の後円部端にも及んでいた。

内濠からは葺石と溝を検出した。葺石は内堤側と墳丘側で確認したものの、墳丘側ではすべてが崩落し、原位置を保っていない。内堤側では墳丘側より小ぶりの人頭大の河原石をややまばらに据えた状況にあり、内堤裾から約１m上方よりはじまる。転落した葺石の検出状況からすれば、斜面中位で終ると考えられる。石材はチャート・珪岩・ヒン岩など

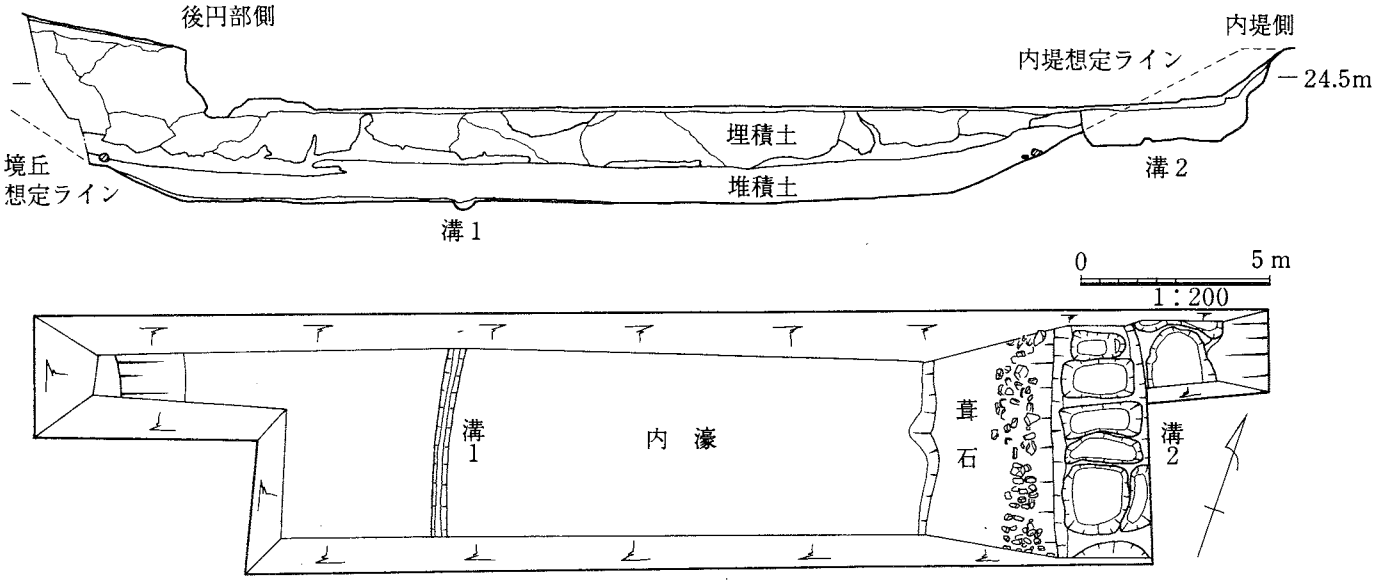


図２　調査区平面図・断面図

である。

溝１は内濠中央付近の底に位置し、内濠の延長方向と同じ東西にのびる。幅0.5m、深さ0.3mをはかり、断面の形状は逆台形である。墳丘表面からの流入土が堆積・埋没した後に泥土層が堆積することから、古墳築造時に機能したと考えられる。

溝２は内濠を埋めた後、内堤内側に沿って掘削したもので、幅５mをはかる。底には幅0.7～2.0m、長さ1.9～2.4mの方形の掘り込みを２列に配し、これらの間には高さ0.5～0.7mの障壁を設けていた。底に自然堆積はほとんどみられず、短期間のうちに埋め戻されたようである。

＜遺　物＞

内濠の泥土層からは埴輪片や木製の鋤とともに数点の石棺材が出土した。

埴輪は小片となっており完形に復元できたものはないものの、遺存状態は良好であった。すべて新池埴輪窯で生産されたもので、円筒埴輪が大部分をしめ、わずかに朝顔形埴輪も含まれる。円筒の一部にはヘラ記号が刻まれ、二本マストの船も認められた。

鋤は溝１直上、泥土の最下層で検出した。柄はなく全体に劣化が進行するものの、現存長45.5cm、刃部幅11cm、厚さ最大２cmをはかる。

石棺材はその後の分布調査で後円部墳頂周辺から採取したものを含めると200点以上あり、いずれも二次的に破砕された小片となっていた。石材には九州・宇土半島産の阿蘇溶結凝灰岩（ピンク凝灰岩）、二上山産の白色凝灰岩（二上山白石）、播磨産の流紋岩質凝灰岩（竜山石）の３種類が認められた。

ピンク凝灰岩は総数が100点以上を数えた。最大の破片は家形石棺の蓋の部材とみられ、階段状の加工面や朱の塗布が認められた。

二上山白石は５点を数えた。最も大きい石材は一辺15cm前後の直方体をなし、２面に加工痕が認められた。形状から家形石棺

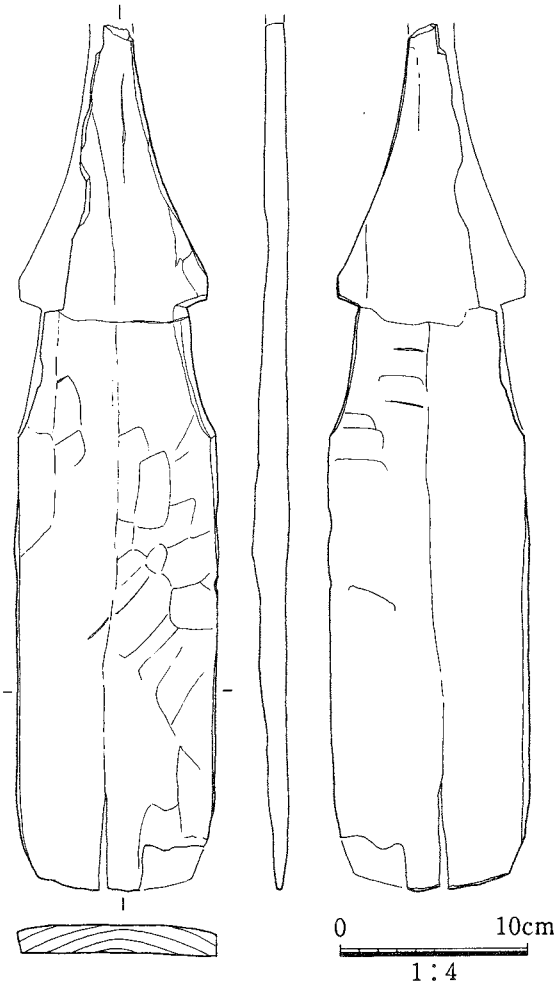


図３　内濠出土木製品

の破片とかんがえられる。

播磨産の凝灰岩は３点あり、墳頂部で採取した２点は竜山石である。もう１点は内濠から出土した重さ85kgの石塊で長さ65cm、幅50cm、厚さ25cmをはかる。明瞭な加工痕こそないものの、側面には平坦な摂理面が存在し石棺材である可能性が考えられる。

まとめ

今回の規模確認調査では後円部側の規模や形状、戦国期の改変の状況があきらかとなった。古墳については内濠の規模・形状が把握できたほか、後円部裾の位置が明確になったことから後円部径が従来よりも７～10mほど縮小することが判明した。また、溝１は古墳築造時に掘削された後、内濠滞水時にはすでに埋没していることから、作業中の湧水や降雨時の排水機能を有していたと考えられる。

また、３種の石棺材はいずれも家形石棺の一部とみられ、主体部内の埋葬状況を察するうえで貴重な資料となる。また、埋土の状況からは12～13世紀まで濠に水を湛えていたことやこの時期に盗掘を受けたことがうかがえる。

築城時における古墳の改変については、墳丘を切り崩して一気に内濠を埋め立てるという他に例を見ない土木工法を採用していた。戦国期において短期間に築城する動員力や技術・発想からすれば、この改変を成し遂げた武将の有力候補の一人としては織田信長があげられよう。

以上のように今回の調査では古墳本来の基礎的データを得た以外にも戦国時代の築城法についてあらたな知見を得ることができ、今回確認した城跡については今城塚古墳と区別するために「今城山城（いまきやまじょう）」と命名された。その実態の解明についても今城塚古墳とともに今後の調査成果に期待されよう。

Ⅱ　文化財保護啓発事業

1．ハニワづくりとスケッチ・ぬり絵大会

日　　時　　平成９年５月31日・６月１日

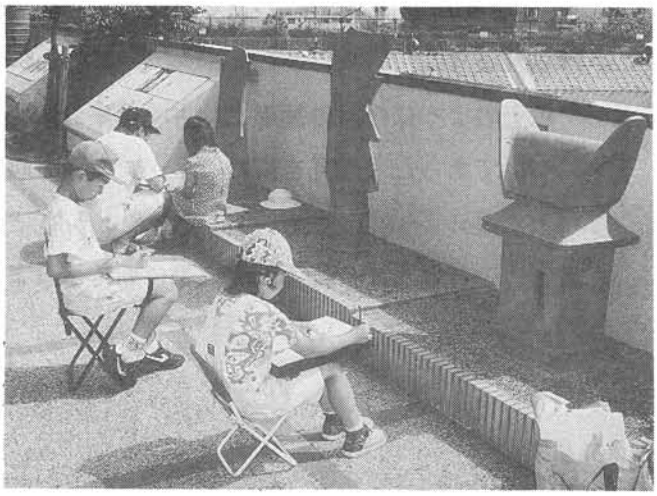
内　　容　　新池ハニワ工場公園において、一人でも多くの方々が文化財に親しみをもち、より一層の文化財の普及・啓発をはかることを目的として実施した。ハニワづくりの部ではハニワをモデルにしたさまざまな土の造形に親しみ、スケッチの部ではハニワ窯や工房の様子を、ぬり絵の部ではキャラクターを自由な色で彩色してもらった。各作品は審査をおこない各部門ごとに「ヲホドの大王賞」などの入賞作品を選び、応募作品はすべてジャスコシティ高槻、さらに入賞作品は小さな展覧会会場でも展示した。

協　　賛　　ジャスコシティ高槻

参 加 者　　451人

作品展示　　ジャスコシティ高槻　　７月23日～27日

　　小さな展覧会会場　　10月１日～６日



2．小さな展覧会

日　　時　　平成９年10月１日～６日

内　　容　　「容器のうつり変わり―縄文土器から近世の焼き物まで4000年」をテーマに時代別に、①山野の生活と縄文土器（縄文時代）、②米つくりのはじまりと弥生土器（弥生時代）、③大王の時代と須恵器の登場（古墳時代）、④役所の土器、村の土器（奈良・平安時代）、⑤陶磁器のあるくらし（鎌倉時代以降）の５つのコーナーを設け、いろいろな時代の人々が、暮らしのなかで焼き物とどのように付き合ってきたのかを紹介した。

また調査速報コーナーでは、最近注目された資料として安満宮山古墳の出土遺物を展示し、あわせて弁天山Ｃ１号墳・郡家車塚古墳の鏡等を参考展示した。

見 学 者　　4,383人

講 演 会　　「装飾付き須恵器の系譜」

日　　時　　平成９年10月５日

講　　師　　福岡澄男〔(財) 大阪府文化財調査研究センター資料普及課長〕

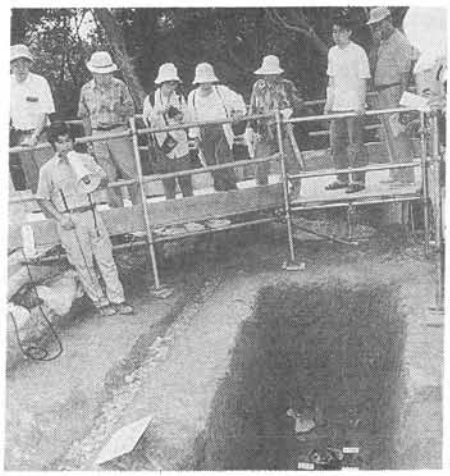
参 加 者　　63人

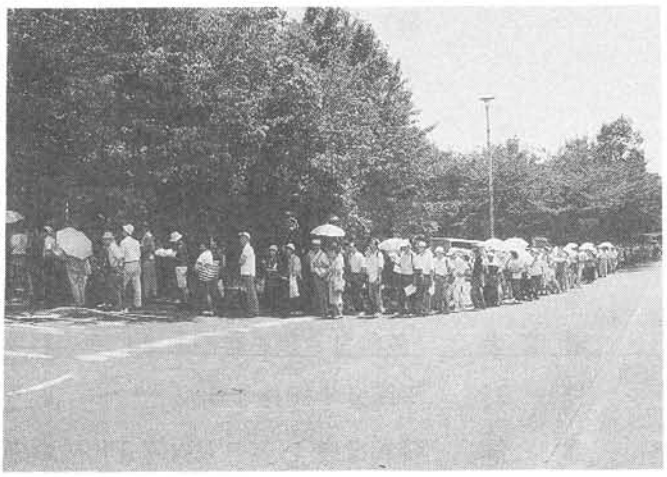
3．発掘調査現地説明会

＜安満宮山古墳＞

・平成９年８月２・３日（参加者6,500人）

公園墓地整備に先立つ調査で日本最古の年号鏡・青龍三年銘鏡をはじめとする５面の青銅鏡のほか、武器・農工具などの鉄製品や1,000点以上のガラス玉・布などが良好な状態で出土したため、現地説明会を実施した。

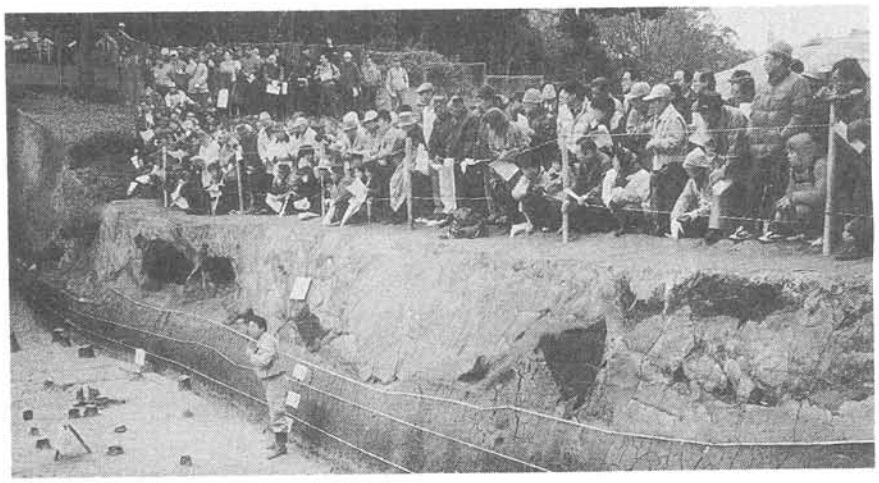




＜今城塚古墳＞

・平成９年12月13日（参加者1,235人）

今城塚古墳後円部北東側内濠での規模確認調査において、戦国時代の築城の状況があきらかになったほか、古墳築城当初の濠の形状や埋土の状況が判明したため、現地説明会を実施した。



4．安満宮山古墳緊急報告会

・平成９年８月31日

基調報告　「安満宮山古墳の調査」

鐘ヶ江一朗（高槻市立埋蔵文化財調査センター技師）

基調講演　「青龍三年鏡とその伴侶」

森田克行（高槻市立埋蔵文化財調査センター次長）

記念講演　「邪馬台国への道」

原口正三（甲子園短期大学教授）

「卑弥呼女王の鏡蔵から」

水野正好（奈良大学学長）

参 加 者　353人

5．市立埋蔵文化財調査センター見学者数

総　　数　3,988人（延べ　108,544人）

6．新池ハニワ工場公園見学者数

総　　数　22,165人（工場館入館者　16,082人）

Ⅲ　指定文化財

「郡家今城遺跡出土旧石器一括」

＜説　明＞

郡家今城遺跡は、高槻市郡家新町・今城町・氷室町一丁目に所在し、低位段丘中央を南流する女瀬川の東岸に位置する、旧石器時代及び奈良・平安時代の集落遺跡である。1969年から十数次にわたって発掘調査がおこなわれている。

なかでも旧石器時代については、1974年に氷室町一丁目786・792～794を調査した際に東西40m、南北28mの範囲から国府型ナイフ形石器を伴う生活面が確認された。

調査の結果、良好な状態でのこされた８単位20数ブロックを数える石器群と礫群から、獲物の解体・調理・石器製作などキャンプ地における一連の作業が復原されている。西日本における後期旧石器時代の指標である、約２万年前の国府文化期のキャンプ地の様相をはじめて具体的に明らかにした遺跡として重要である。石器は、国府型ナイフ形石器を中心に、掻器・彫器・翼状剥片・石核・叩き石・剥片多数があり、国府文化でもっとも技術水準が高い時期における、典型的な石器組成を示している。加えて二上山産のサヌカイトの他に北陸地方の石材も含まれており、当時の広範な交流をうかがわせる貴重な資料である。以下、主要なものについて述べる。

ナイフ形石器

国府文化期の主要な生産用具と考えられている。サヌカイトから瀬戸内技法により剥離した翼状剥片を素材とする。素材の形態により大きさ・形状はさまざまであるが、大半は背部調整を加えて先端部を鋭く尖らせるとともに幅・厚みを整え、基部を折りとった尖頭器状を呈する。

郡家今城遺跡のナイフ形石器は長さ３cm～８cm、幅１～２cmをはかり、77点（完形品42点、破損品35点）ある。そのほとんどは製品の形で持ち込まれており、一方、本遺跡で製作された製品の大半は次のキャンプ地へ持ち去られている。

掻　器

11点ある。剥片もしくは石核の残欠を素材とし、細かい調整を施して丸い刃部をつくっている。北陸地方産の硬質頁岩製のものがある。

彫　器

４点ある。チャート製の１点には刃部再生剥片２点が接合する。

翼状剥片

８点ある。チャート及び流紋岩を素材とし、製品として持ち込まれたものである。

翼状剥片石核

11点ある。盤状剥片を素材としている。翼状剥片の接合したものが2点、石核残欠を掻器に再利用しているもの3点、使用痕の認められるもの1点がある。

叩き石

4点ある。打撃痕の違いから、石核からの剥片剥離用と二次調整用に分けられる。剥片剥離用のものは北陸地方の珪岩、他は粘板岩を使用している。

剥　片

石器製作の際に生じる剥片（石屑）が多数出土している。これら大小の剥片の分布状況は、本遺跡での石器製作の内容を推定するうえで重要な資料となっている。

礫　類

調理用具として持ち込まれたものである。火熱を受け、大部分が小さく破砕している。本来の大きさは拳大程度であり、チャート・砂岩・珪岩・輝緑岩などの河原石が用いられている。

高槻市郡家今城遺跡出土　旧石器一覧表

ナイフ形石器	77点
掻器	11点
彫器	4点
二次加工のある剥片	2点
使用痕のある剥片	11点
翼状剥片	67点
縦長剥片	8点
翼状剥片石核	11点
縦長剥片石核	1点
叩き石	4点
計	196点
剥片	一括
礫類	一括

Ⅳ　資料紹介

梶原寺跡出土の羽子板

宮　崎　康　雄

梶原寺跡は高槻市東部に位置する古代寺院で、出土した瓦より７世紀後半頃に創建したとされている。『摂津職解』天平勝宝９年（757）には東大寺大仏殿回廊の瓦を焼成・納品したことが記されており、周辺では大形の掘立柱建物や瓦窯跡などを検出している。寺域は畑山神社を中心にひろがるとされているものの、伽藍の位置や構成などは現在のところあきらかではない。

今回紹介する羽子板は平成９年度に調査した97―Ｂ地区で出土したものである。調査地は畑山神社の南東側に位置し、西国街道に面している。

検出遺構には近世・近代の土坑・落ち込み・柱穴などがあり、少量の土器類や近世瓦などが出土したほか、磨耗した瓦の小片を検出している。寺院に関わる遺構はみられなかった。

落ち込み１は調査区の大半をしめる。幅９ｍ以上、深さ0.6ｍをはかり、底は平坦となっていた。埋土は３層確認でき、上層から順に青灰色砂（0.1ｍ）、暗青灰色砂質土（0.4ｍ）、暗灰色砂礫（0.1ｍ）である。遺物はすべて中層の暗青灰色砂質土から出土した。

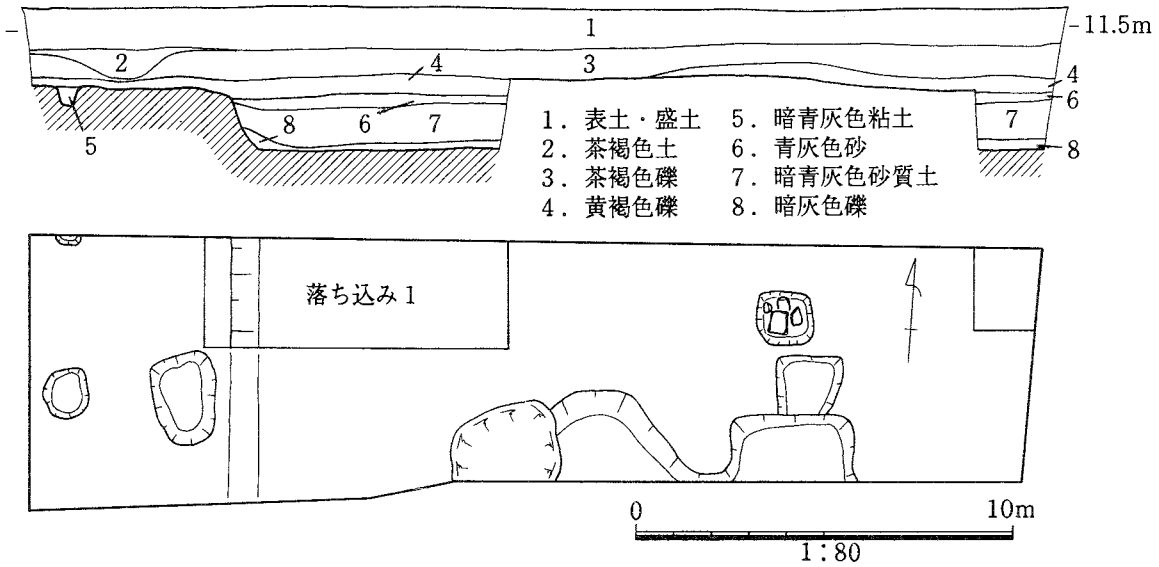


図１　梶原寺跡（97−B地区）　平面図・土層図

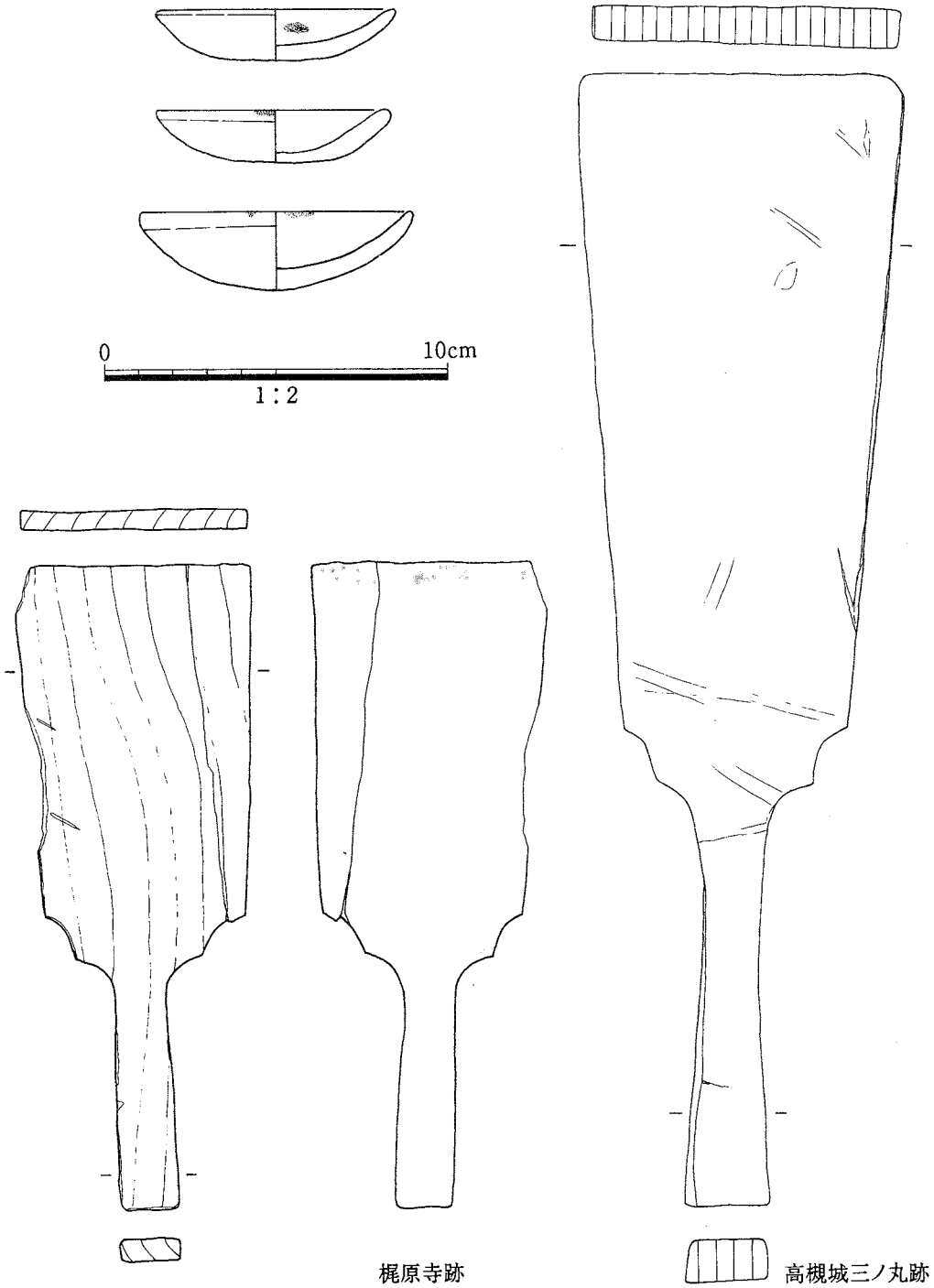


図2　出土遺物実測図

羽子板は調査区北西端、中層の最下位より出土し、土師器小皿３点、牛歯片が伴出している。

羽子板は杉もしくは檜とみられる針葉樹の薄板を加工したものである。

板部は上端がわずかに開き、基部側は二段の弧状に切り欠く二手切りとなっている。両面とも磨耗はなく、加工時の鋸引きの痕跡をわずかにとどめる。片側の面の上下には横方向に連なるように朱が遺存することから、もとは幅約５㎜の朱線が引かれていたようである。朱線の間についての施朱・施文については判然とせず、すでに剥落したのかは不明である。

柄は中軸が上端面に対して直交せず、わずかに角度をもって直線的にのびる。幅は下端にむかってわずかに広くなるが、厚みは変化しない。側縁はいずれも加工したままの状態で二次的に面取りを施した痕跡はなく、磨滅もしていない。法量は全長18.5cm、厚さ0.6cm、幅6.8cm、柄幅1.8cmをはかる。

伴出した土師器小皿は３点あり、いずれも粗製品である。焼成は良く、硬質である。すべて口縁端部もしくは口縁部内面の上端付近に煤が付着することから、灯明皿として使用されたのであろう。17世紀以降と考えられるものの、詳細な時期は明らかでない。

本市では高槻城三ノ丸跡で羽子板の出土例がある。本例とおなじ二手切りで成形し、全長は32.6cmをはかる。両面とも加工痕をとどめており、羽根突き等に使用した痕跡はない。時期は近世から近代にかけてとみられている。

羽子板は本来魔除けに用いられたもので、遊戯としての羽根つきも厄除けの意味合いがつよい。羽子板の出土例が多い広島県草戸千軒遺跡では使用痕をとどめた羽子板やムクロジの種子を用いた羽が報告されているが、大部分は１点のみの出土である。

本例は遊戯に不向きな小形品であることや灯明皿・牛歯と伴出している点から祭祀に用いられたとみられ、江戸時代における羽子板の使用法を示す好例となろう。

あとがき

平成９年度は約100件の調査を実施し、このうち注目された６遺跡の調査の概要を掲載しています。いずれも本市を代表する遺跡であり、とくに津之江南遺跡ではまとまった面積を調査したことにより、これまで判然としなかった集落の内容がわずかながらも明らかになりつつあります。このほか、宮田遺跡や新池遺跡では掘立柱建物群を検出しており、とくに宮田遺跡では柵や溝で区画された屋敷地を確認することができました。

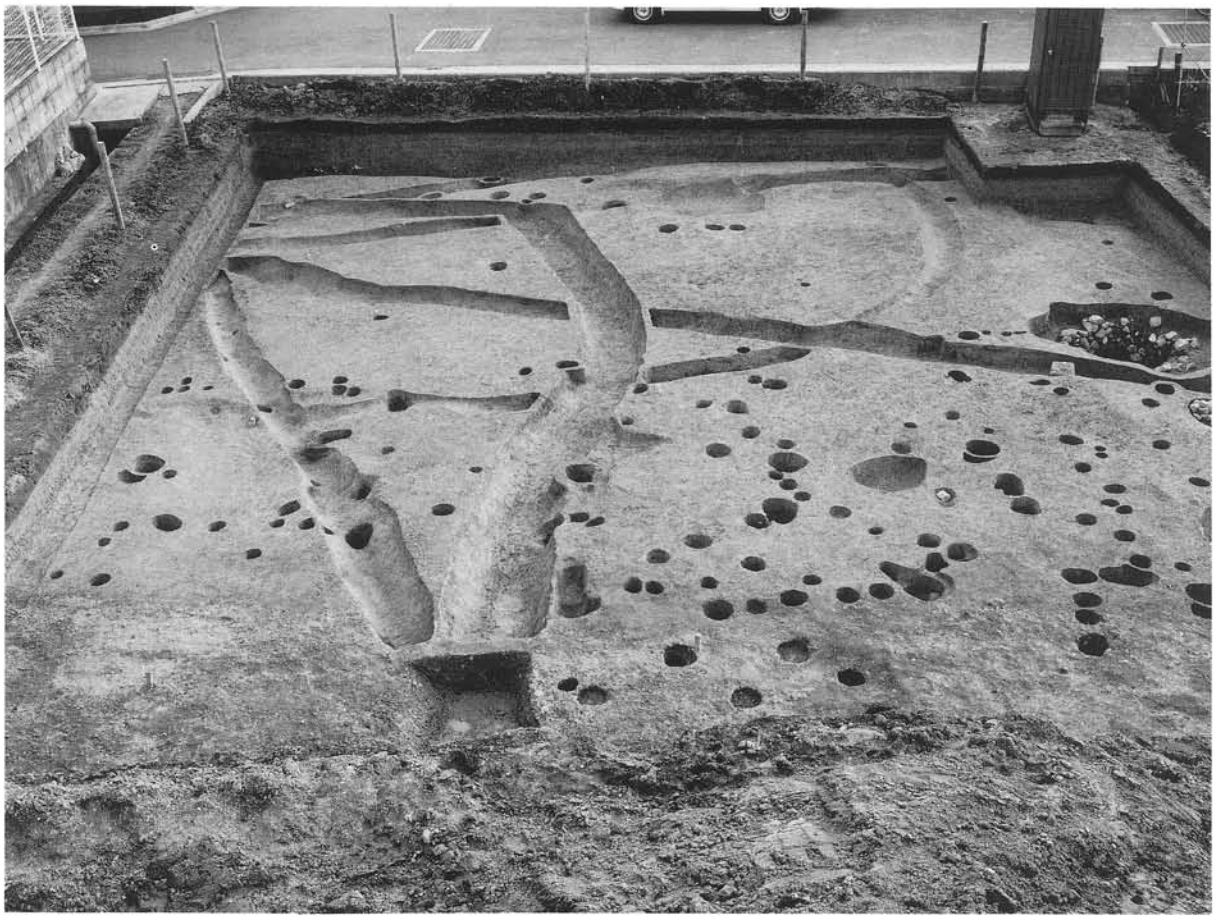
平成９年度は安満宮山古墳の発見をはじめ、史跡今城塚古墳での最初の本格的な発掘調査を実施するなど、例年になく「発見」の多い一年でした。そしてこれらの調査の現地説明会や緊急報告会、小さな展覧会など文化財とふれあうイベントにはのべ12,000人をこえる人たちが参加し、市民の関心の高さを痛感することができました。文化財の保護調査・啓発に対する市民の期待にこたえられるよう一層努力していきたいとかんがえています。

（Ｙ・Ｍ）

図　　版

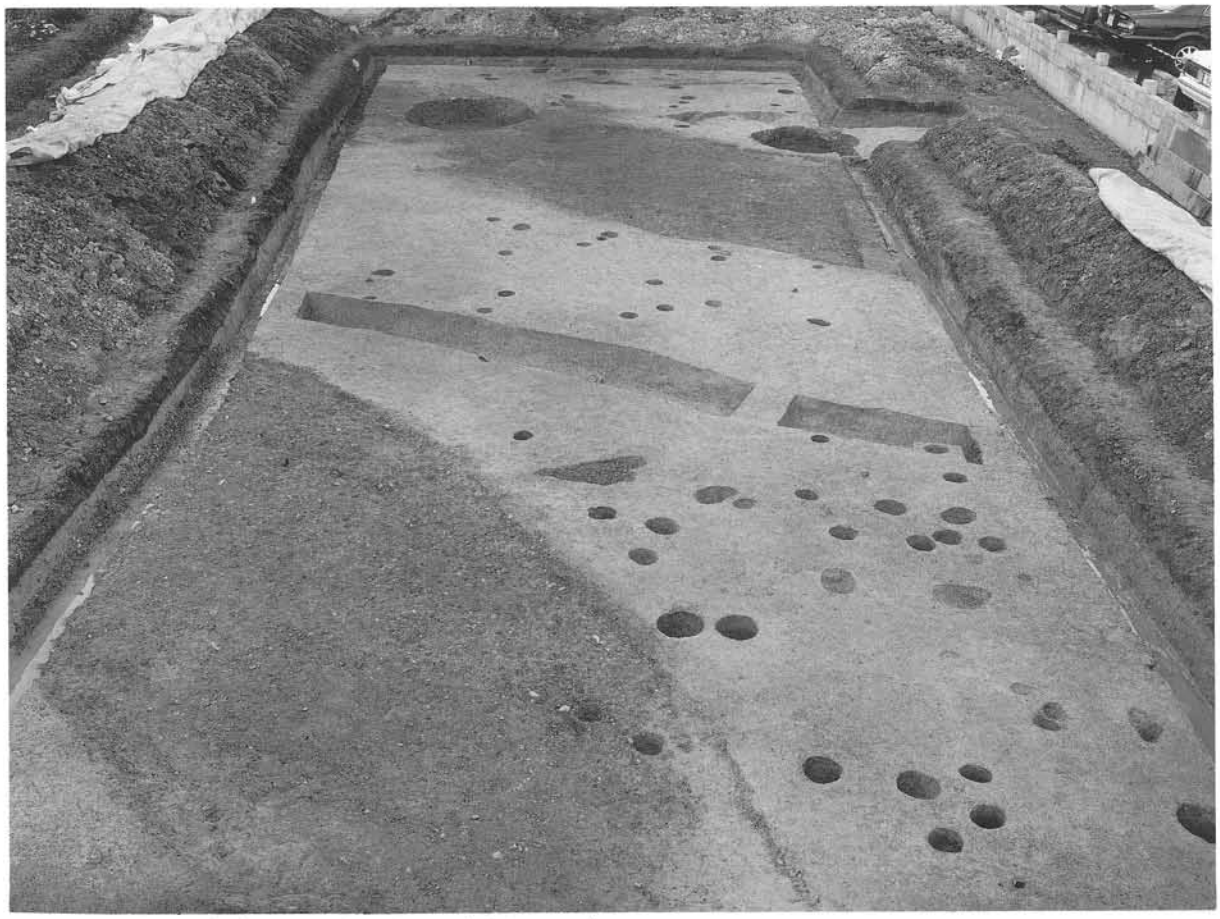
a．高槻城跡（97－D地区）　全景（東側から）

b．高槻城跡（97－D地区）　井戸1（西側から）

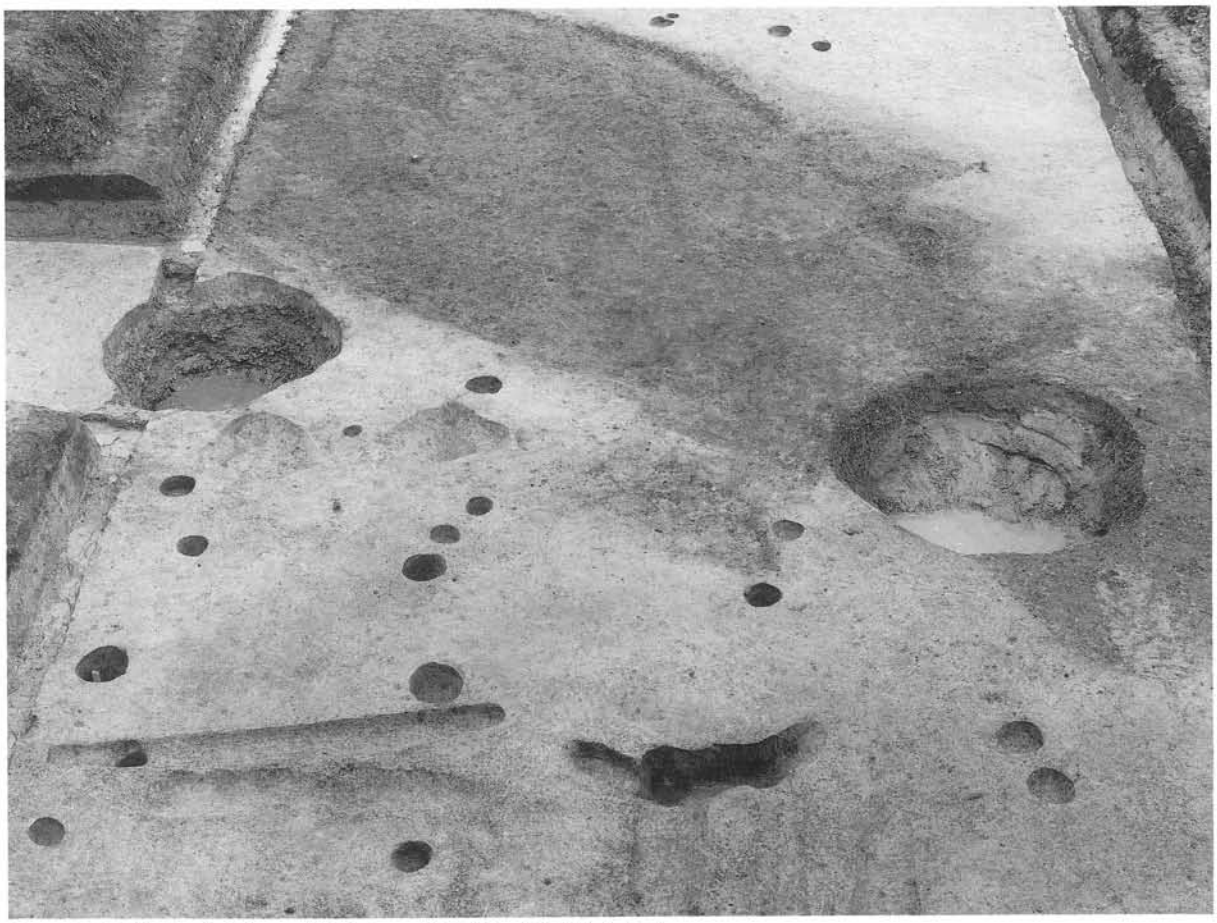


a．宮田遺跡（97－A地区）　調査区南半（北側から）

b．宮田遺跡（97－A地区）　調査区北半（北側から）

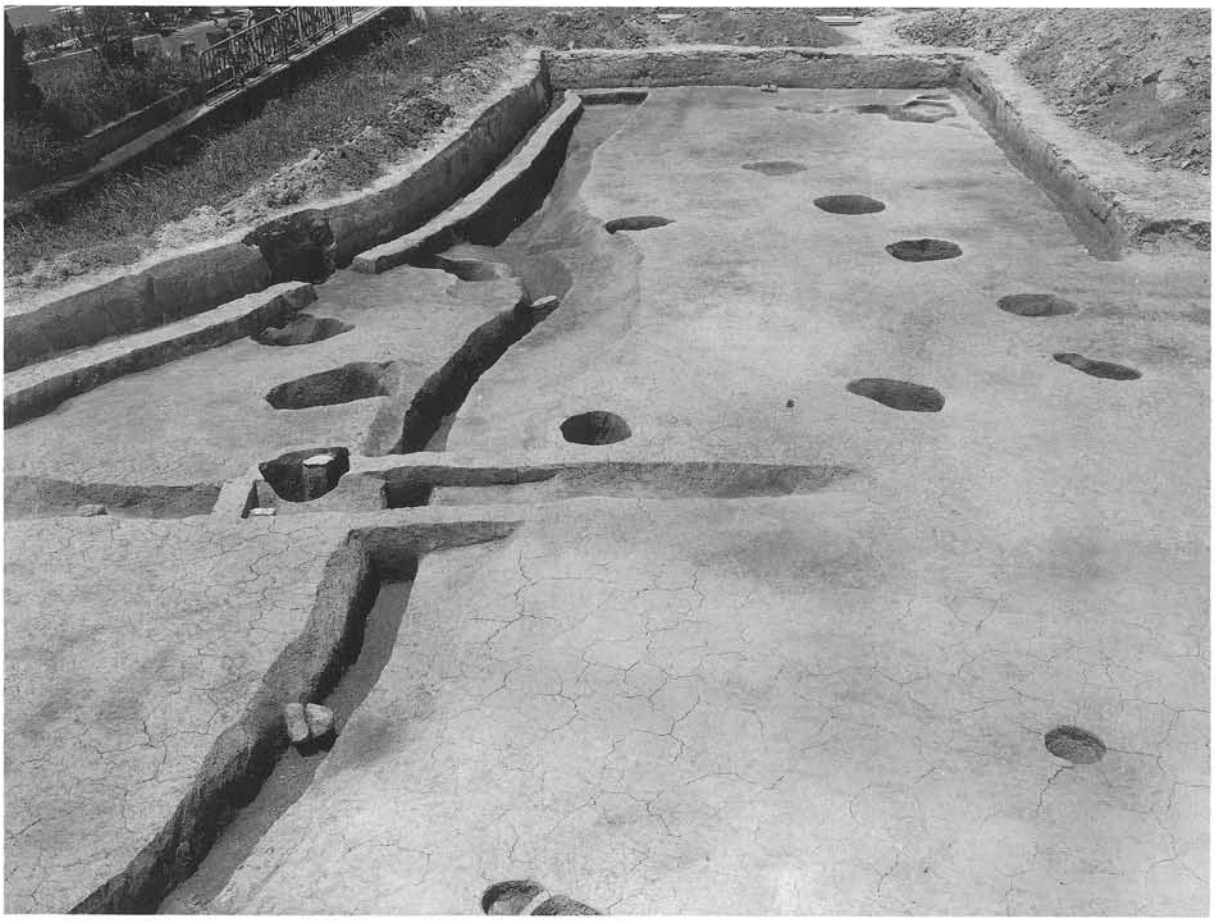


a．宮田遺跡（2）　調査区全景（南側から）



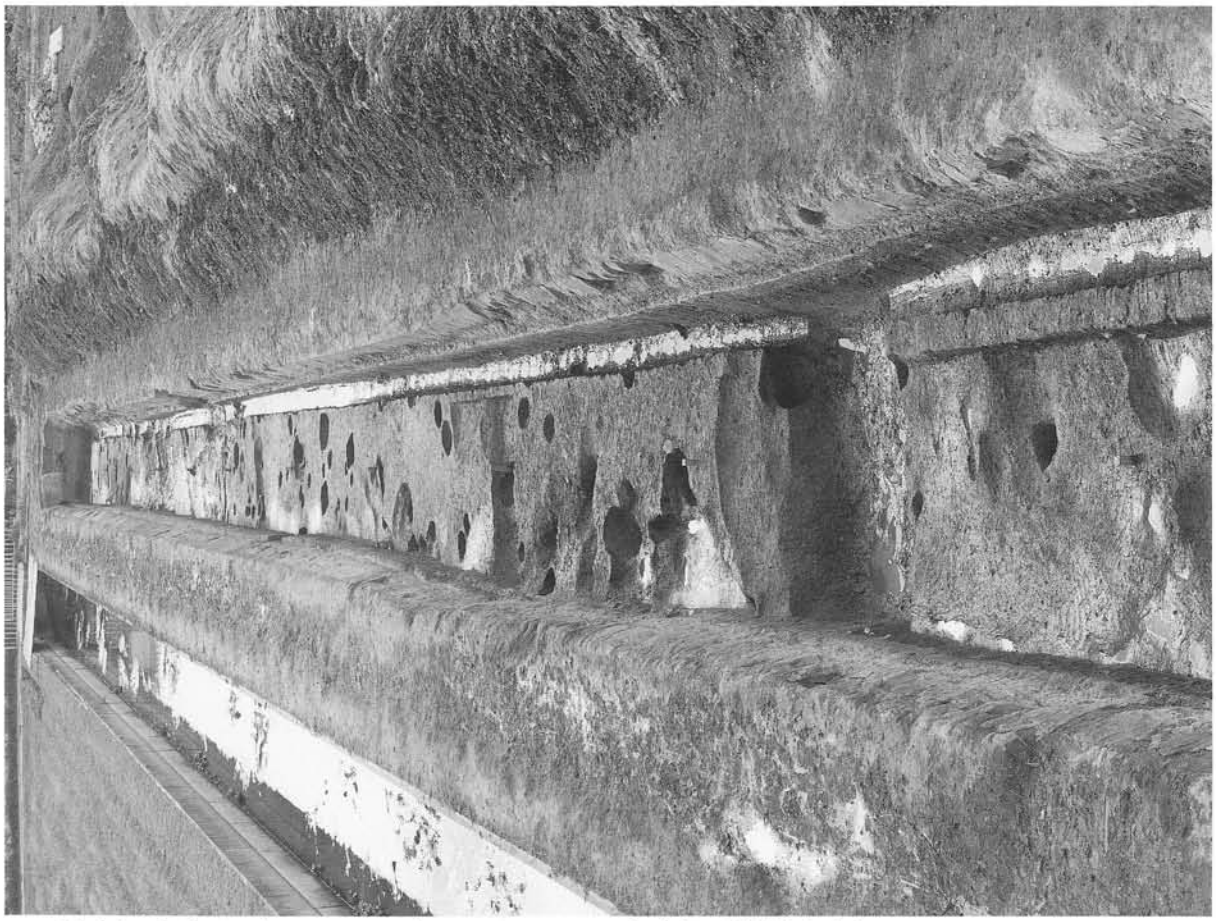
b．宮田遺跡（2）　井戸1・井戸2（北側から）

a．新池遺跡（97－A地区）　全景（西側から）



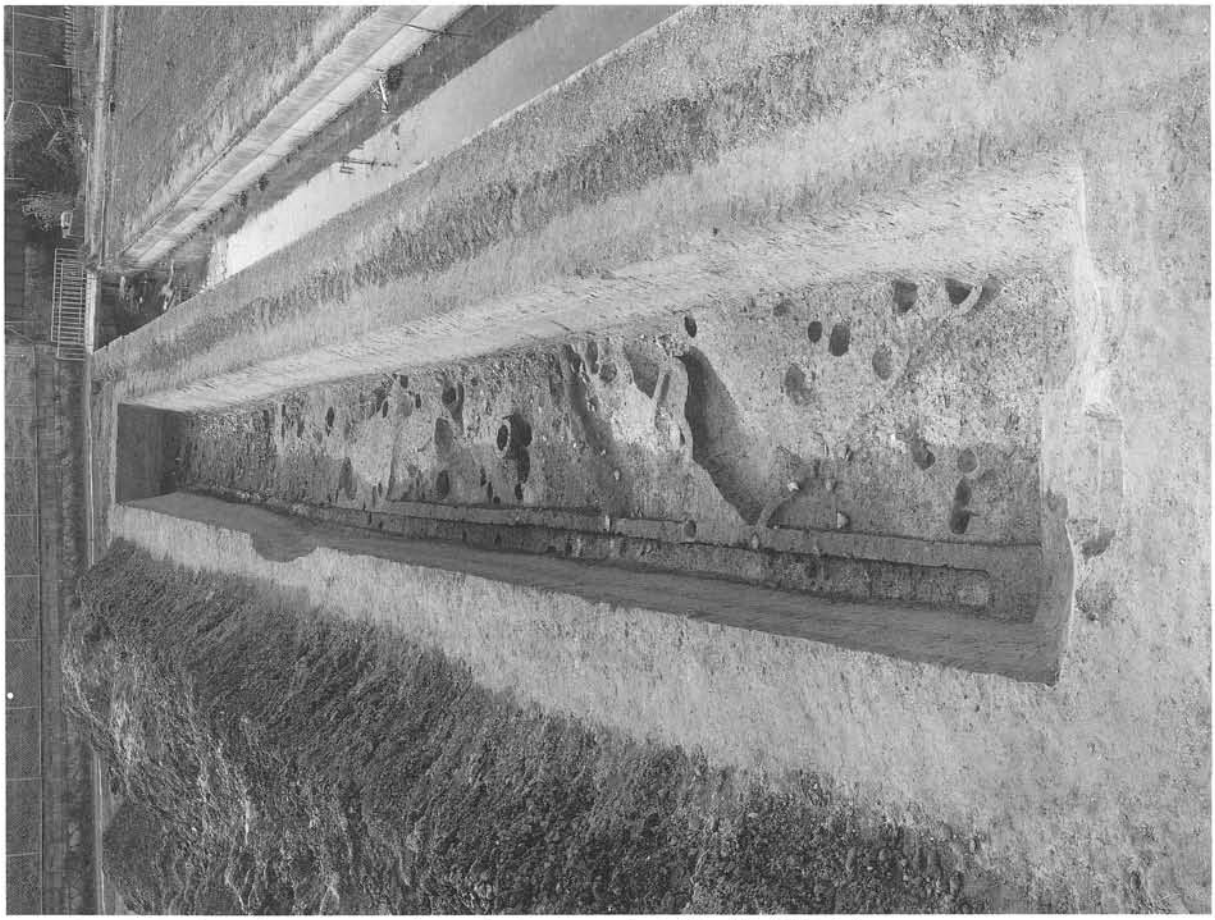
b．新池遺跡（97－A地区）　全景（東側から）

a．津之江南遺跡（97－A地区）　西トレンチ北半部（北側から）

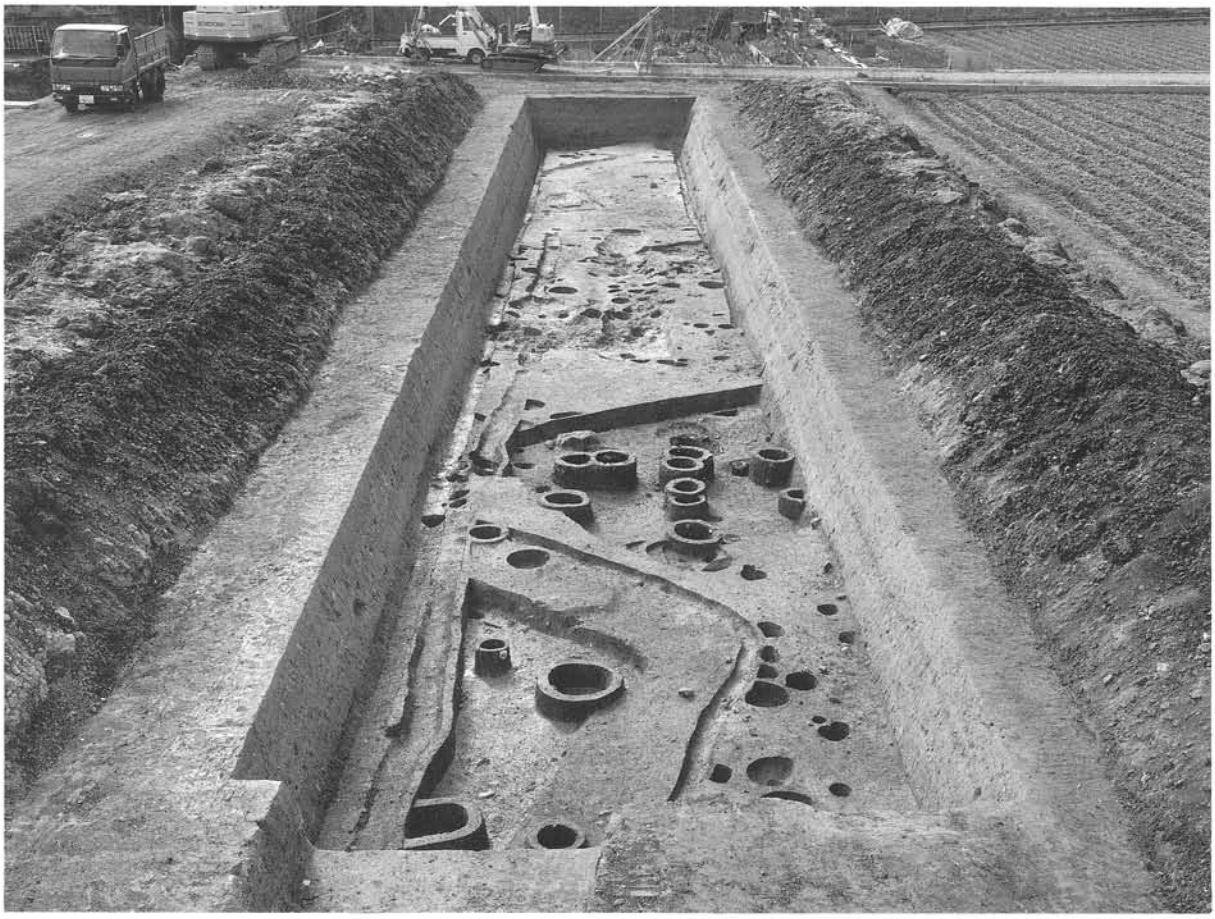


b．津之江南遺跡（97－A地区）　西トレンチ南半部（北側から）

a．津之江南遺跡（97－A地区）　東トレンチ北半部（北側から）



b．津之江南遺跡（97－A地区）　東トレンチ南半部（北側から）



a．津之江南遺跡（97－B地区）　全景（北側から）

b．津之江南遺跡（97－B地区）　住居5・6（南東側から）

a．津之江南遺跡（97－C地区）　全景（北側から）

b．津之江南遺跡（97－C地区）　住居7～9（北側から）

a．津之江南遺跡（97－D地区）　北全景（南側から）

b．津之江南遺跡（97－D地区）　南全景（北側から）

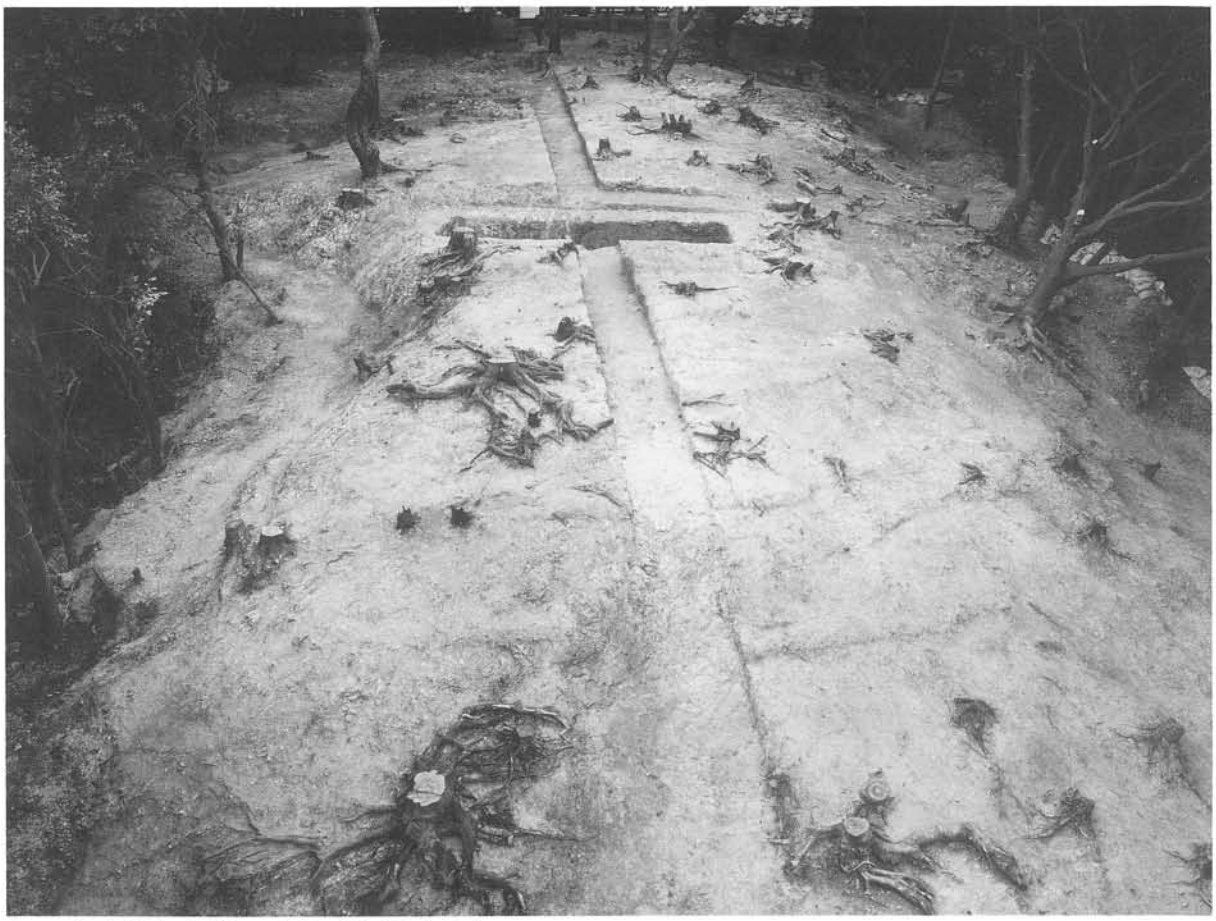
a．津之江南遺跡（97－E地区）　全景（南側から）

b．津之江南遺跡（97－E地区）　全景（北側から）

a．津之江南遺跡（97－E地区）　井戸5（西側から）

b．津之江南遺跡（97－E地区）　井戸5枠

a．安満宮山古墳遠景（南西側から）



b．安満宮山古墳　全景（南側から）

a．安満宮山古墳　墓坑（東側から）

3号鏡

1号鏡

4号鏡

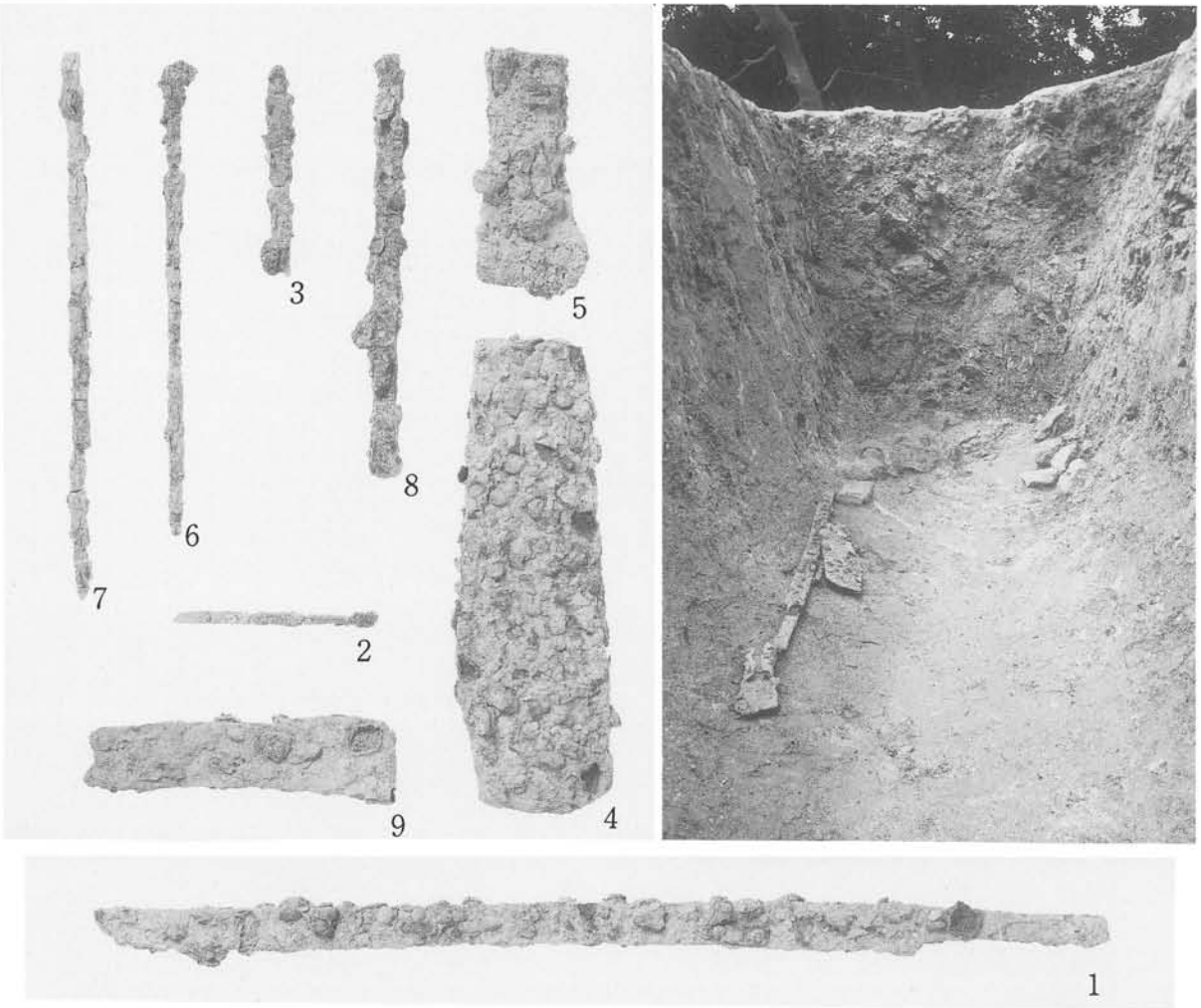
2号鏡

5号鏡

b．安満宮山古墳　青銅鏡（国保有）

約1／3

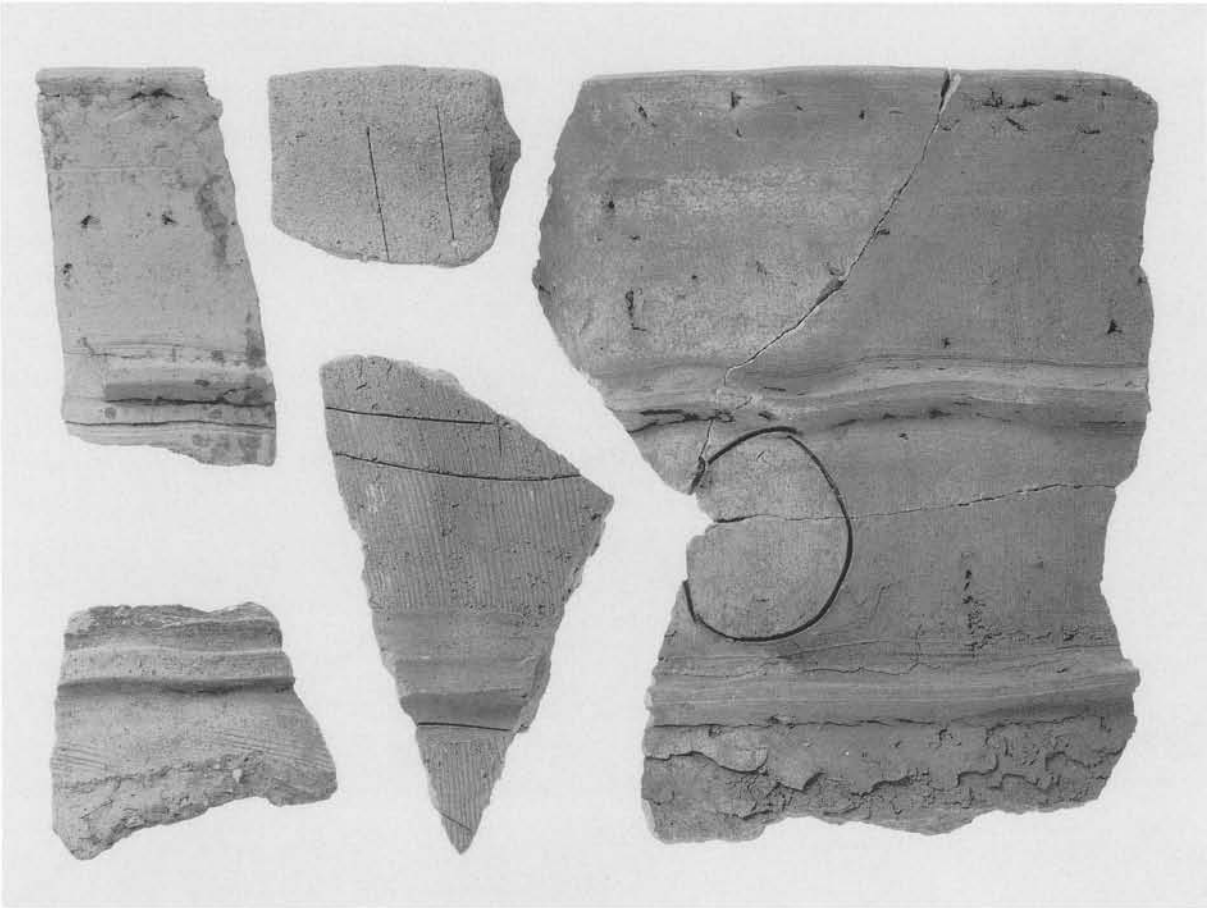
a．安満宮山古墳　鏡出土状況



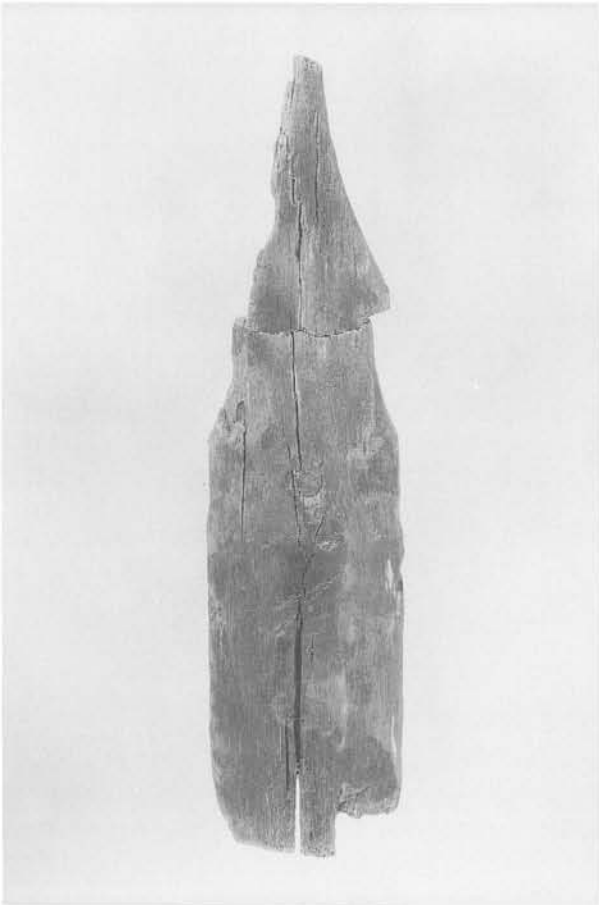
b．安満宮山古墳　鉄製品（国保有）・検出状況（東側から）

a．今城塚古墳　全景（北東側から）

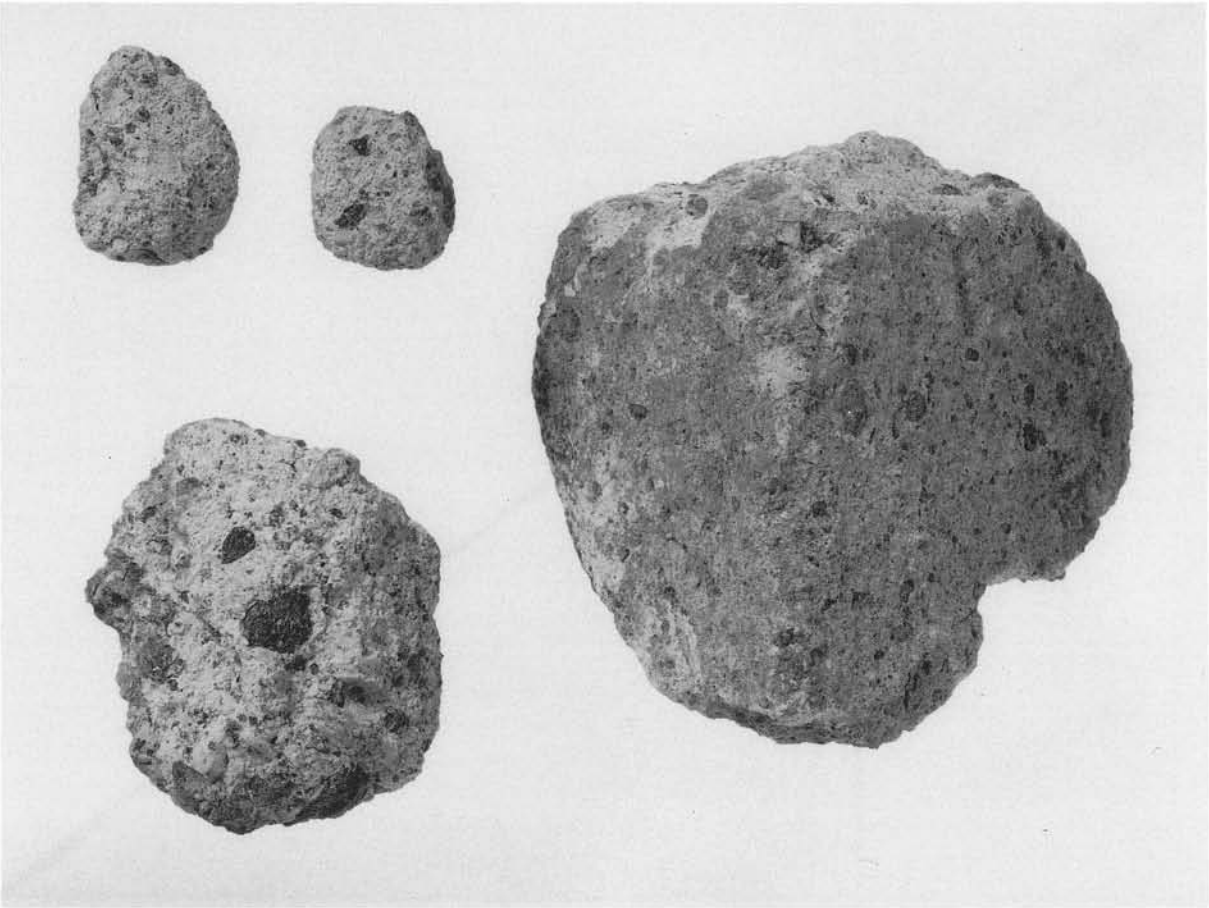
b．今城塚古墳　葺石・溝２（南側から）



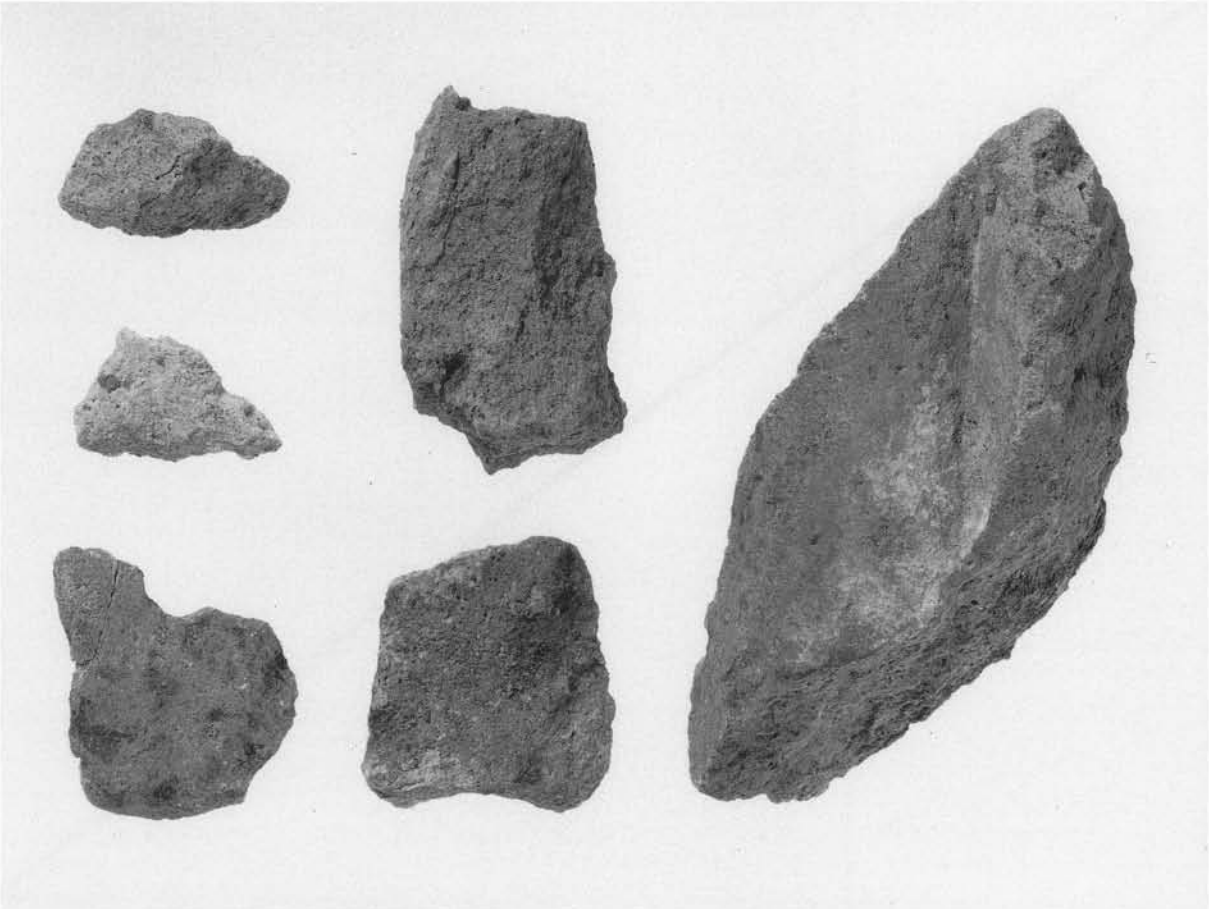
a．今城塚古墳　円筒埴輪　　約1／2



b．今城塚古墳　木製品（鋤）　　約1／4

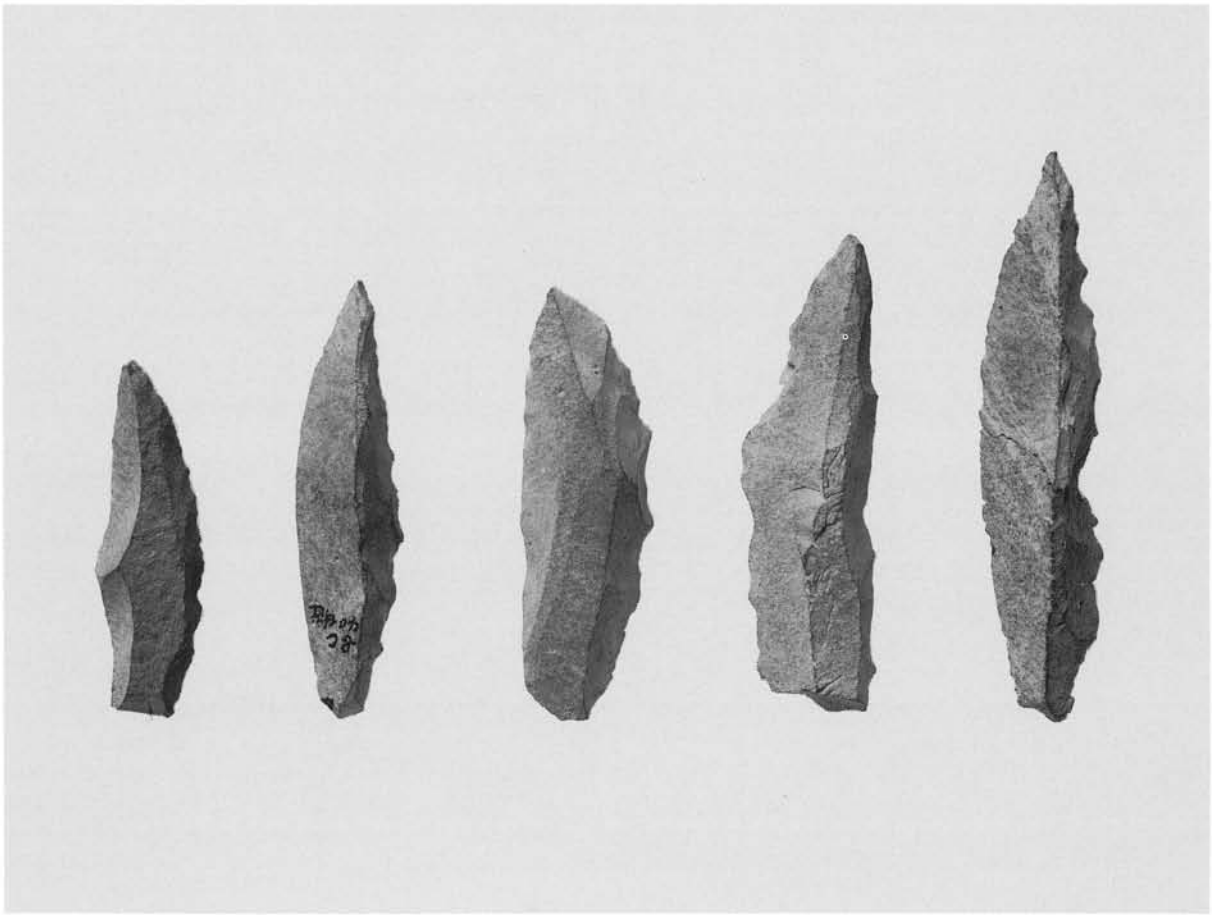


a．今城塚古墳　石棺材（二上山産白色凝灰岩）　約1／2



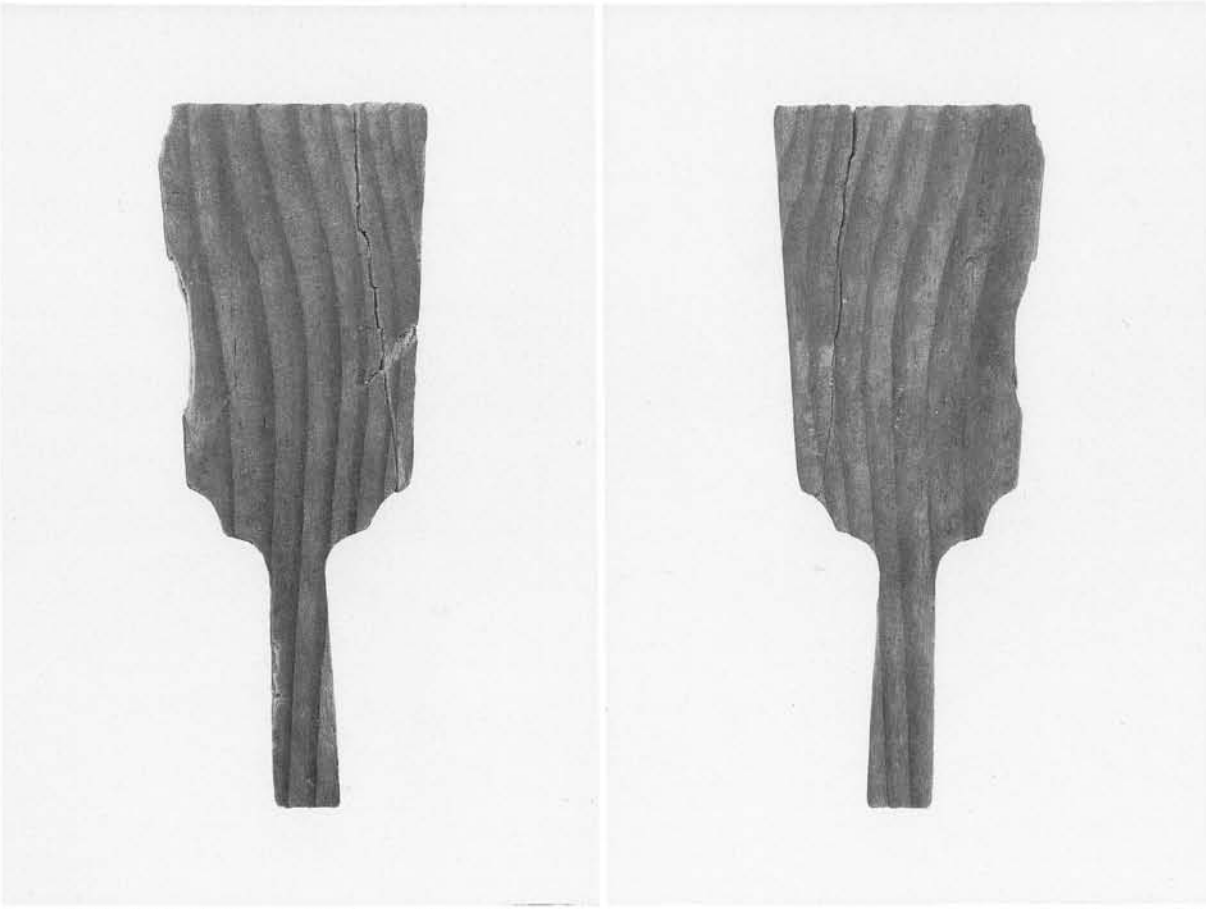
b．今城塚古墳　石棺材（阿蘇溶結凝灰岩）　約1／2

a．郡家今城遺跡出土旧石器（A群）　約1／1



b．群家今城遺跡出土旧石器（E群）　約1／1

a．梶原寺跡（97－B地区）　全景（西側から）



b．梶原寺跡（97－B地区）　羽子板　　約1／2

高槻市文化財年報　平成９年度

平成11年１月29日

発　　行　高槻市教育委員会
高槻市立埋蔵文化財調査センター
〒569-1042　高槻市南平台五丁目21番１号

印　　刷　株式会社　邦文社　高槻支店
〒569-0844　高槻市柱本四丁目18番３号